

長い間、旧約聖書から学んで来ましたが、今日から新約聖書を学ぶこととします。新約聖書を学ぶにあたって、新約聖書はなぜ記されているのかを学びたいと思います。

旧約聖書では、アブラハムに始まるイスラエルの話しでしたが、新約聖書はイエスさまだと思っている人も多いかと思います。確かに、旧約聖書において約束されていたメシアとして、イエスさまが人として生まれられ、私たちの救いのために、十字架にお架かりくださったことが中心となります。イエスさまの十字架を抜きにして、新約聖書を語ることはできません。

しかしもっと大切なことは、新約聖書で語られているイエスさまの十字架は、神さまが私たちを救うためであったということです。今日は、エフェソ書1章を読んでいますが、今日の聖句の前、1:4で、次のように語られています。

**天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、
汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。**

神さまは、あなたを知っておられます。愛してくださっています。そして、死んで滅びるのではなく、イエスさまの十字架によって救ってくださることを、決定してくださっています。

そして今日の聖句ですね。

**1:5 イエス・キリストによって神の子にしようと、
御心のままに前もってお定めになったのです。**

神さまは、みんなのことを知っておられ、大好きです。愛してくださっています。だからこそ、神さまは、イエスさまを人として遣わしてくださり、十字架に架けてくださったのです。イエスさまの十字架は、あなたのためだったと、聖書は語ります。そして、神さまは、あなたの生まれる前から、天地創造の前から、イエスさまによって救われることを決定してくださっていました。

だからこそ、神さまがみんなのことを大好きです。愛してくださっています。だからこそ、いつでも一緒にいてくださり、守り、助けてくださいます。だからこそ、私たちが神さまに祈る時、神さまは、あなたの祈りを聞いてくださいます。

今日は、聖書はあなたのために記されているのだということを、覚えて頂きたいと思います。

お祈りします。

主なる神さま、神さまが私たち一人ひとりを愛してくださり、ありがとうございます。私たちが神さまを忘れたときも、神さまは私たちを覚え、守り導いてくださっていることに、感謝します。

どうか、私たちも、神さまの愛を覚え、神さまを信じるができるようにしてください。イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

新約聖書は、イエスさまの誕生に始まりますが、イエスさまは、突然、生まれ、「わたしが旧約聖書で約束されていたメシアだ。わたしを信じなさい」と語られたわけではありません。イエスさまがお生まれになるとき、これからメシアがお生まれになるということが人々に知らされなければなりません。人々から「おまえは本当にメシアなのか」と疑われるからです。

そのため、主なる神さまは、イエスさまがお生まれになるにあたり、エリヤ、つまり預言者を遣わすことを旧約聖書の時代に、約束されていました。今日はこのことを学びます。

祭司にザカリアという人がいました。パートナーはエリザベトさんです。二人とも神さまを信じており、周りの人たちからも、立派なクリスチャンだと思われていました。しかし、二人には子どもが生まれませんでした。そのため、人々は、神さまから呪われているのではないかとも思われていました。

ザカリアさんは、くじが当たり、祭司としての大切な働きをすることとなりました。ただ一人、主の聖所に入って行う働きであり、非常に名誉なことでした。聖所の中は、他に誰も入ることができません。ザカリアさん一人です。

このとき、ザカリアさんの前に、天使が現れます。ザカリアさんは、自分一人だと思っていたのに、急に天使が現れ、驚き、恐れます。

天使は語ります。13-14「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。」天使は、ザカリアに子どもが生まれることを約束してくださいます。

それだけではありません。1:17「彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心の子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」生まれるヨハネが先立ち、主であるイエスさまが後に従うと、天使は語ります。旧約聖書で約束されていたメシアが、ザカリアの息子として生まれるのだと、天使は約束してくださいます。ザカリアさんは、信じることができませんでした。そのため、神さまは、赤ちゃんが生まれるまで、ザカリアさんが話しができないようにされます。

神さまは約束を果たしてくださいます。そして神さまには不可能なことはありません。私たちは、旧約聖書で神さまが約束されたように、預言者としてヨハネさんが遣わされ、その後イエスさまがお生まれになったことを信じることが求められています。

神さま、神さまは、約束されたことを破ることなく、メシアであるイエスさまをお遣わしくされました。そしてイエスさまがお生まれになる前に、みんなが分かるように、ヨハネさんをお遣わしくされました。神さまが約束してくださったとおり、イエスさまが来られることにより、私たちの救いは実現しました。

私たちも神さまを信じて、神さまのもう一つのお約束である天国が来る日を、喜びをもって待つことができるようにしてください。

イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

神さまは、救い主であるイエスさまがお生まれになる前に、天使を祭司ザアカイさんにつかわし、イエスさまを証しするヨハネが生まれることを約束してくださいました。旧約聖書において、繰り返し約束されていたメシアが、いよいよ与えられることを、ヨハネはイスラエルの人たちに証ししなければなりません。

ザアカイさんは、天使と出会い、ヨハネが生まれることを伝えられて以降、まだ言葉を発することができません。しかしそうした中、妻のエリザベトは、妊娠して、赤ちゃんが生まれようとしていました。

そうした中、もう一人の赤ちゃんが生まれることが約束されます。メシアであるイエスさまの誕生の予告です。マリアのところに天使ガブリエルが登場します。このときマリアは、今の中学生くらいの14歳位でした。これからヨセフと結婚を控え、準備していました。そのようなときに、天使が現れ、マリアから聖霊によって、赤ちゃんが生まれることを約束します。結婚する前に赤ちゃんが生まれることなど考えられません。しかし天使は、1:35 「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。

だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」。

と語り、さらに、親類のエリザベトも、男の子を身ごもっていることを伝え、さらに、1:37 「神にはできないことは何一つない」。と語ります。

マリアにとってはとんでもないことが起ころうとしています。ヨセフと結婚することができるのだろうか、周囲の人たちから白い目で見られないか、罪を犯した女として裁かれないだろうか、と恐ろしくなったのではないかと思います。

それでもマリアは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と答え、神さまを信じることにしました。

神さまは、私たちにとって「不可能だ」と思うことでも行われます。そればかりか、マリアさんが不安になり恐ろしくなりましたが、神さまはマリアさんを守ってくださり、またヨセフと結婚することもできました。神さまは、旧約聖書の約束を守り、救い主メシアであるイエスさまを、私たちにお与えくださるばかりか、マリアさんもヨセフさんも守ってくださいました。

そして神さまは、私たち一人ひとりもご存じです。私たちが救われるためにイエスさまが与えられましたが、同時に、私たち一人ひとりも、神さまはいつも見守っていてくださいます。そして、助けてくださいます。

だからこそ、神さまを信じ、また神さまにいつも委ねてお祈りすることをしていただきたいと思います。

お祈りします。神さま、旧約聖書における約束を守るために、救い主であるイエスさまを私たちにお与えくださり、ありがとうございます。そのためにお母さんとなるマリアさんをも守ってくださり、喜びで満たしてくださり、ありがとうございます。どうか、私たちも神さまによって守られ、神の子としての歩みを行うことができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

新約聖書には、イエスさまのお話を中心に語られていますが、神さまであり、救い主であるイエスさまがお生まれになることは、前もって人々に伝えられる必要がありました。イエスさまが、いきなり「自分が神だ」と語っても、誰も信じることができないからです。

そのために、神さまは、そのことを前もって伝える人、預言者であるヨハネさんをお送りくださいました。それも、ヨハネさんの誕生も、誰にでも分かるようにしました。

ヨハネさんのお父さんとなるザカリアさんは、天使からヨハネが誕生することが予告された後、耳が聞こえず、人の話を聞くことができず、話すこともできなくなっていました。

そうした中、妻であるエリサベトさんは、子どもが生まれることがわかり、だんだんとお腹が大きくなってきました。そして、いよいよ子どもが生まれる時がきました。子どもが生まれれば、名前を付けなければなりません。周りにいた人たちは、父親の同じ「ザカリア」と付けようとします。しかしこのとき、エリザベトさんは「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と語ります。周りの人たちはびっくりします。親戚に、ヨハネという名前の人はおらず、そのような名前を付けることをしなかったからです。

そうしたときに、父親であるザカリアさんにも聞きます。「この子に何と名を付けたいか」と。このとき、ザカリアさんは、字を書くため板を持ってこさせて、そこに書きます。「この子の名はヨハネ」と。エリザベトさんがみんなに語ったことを聞くことができなかったザカリアさんが、同じことを書いたので、周りの人たちはびっくりしました。

しかしこのとき、

**すると、たちまち ザカリアは口が開き、
舌がほどけ、神を賛美し始めた。**

前もって天使がザカリアさんに伝えたヨハネという名前を、エリザベトさんと確認していたのですね。神さまが働いておられる、神さまの恵みと祝福があるのだということが、わかったからこそ、ザカリアさんもエリザベトさんも、天使が語ったとおり「子の名をヨハネ」と付けたのです。

神さまは、いつでも私たちと一緒に居てくださいます。そして、ザカリアさんとエリザベトさんに働きかけてくださったように、私たちにも働いてくださいます。だからこそ、私たちがお祈りするとき、神さまはそれを聞いてくださいます。そのため、神さまを信じ、また、神さまにお祈りしていただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、ザカリアさんとエリザベトさんが天使の言葉を信じて、神さまを讃美することができたように、私たちも、神さまを信じ、神さまの恵みに生きることができるようになってください。このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。アーメン。

聖書に出てくる人の中で、一番大切な人は、イエスさまです。イエスさまが聖書の中心におられると言って良いかと思います。真の神の子である方が、人としてお生まれくださいました。だからこそ、私たちは、イエスさまがお生まれになったクリスマスをお祝いします。教会において大切な日は、このクリスマスとイースター、ペンテコステです。イースターとは、イエスさまが十字架で亡くなられた後、三日目の朝に復活されたことを覚える日です。このことからイエスさまが、聖書において、そして教会において最も大切な人であることが分かるかと思います。

11月に入りましたから、クリスマスまで1ヶ月半位です。クリスマスに、改めてイエスさまがどのようにお生まれになったのかを学ぶこととしますが、今日は、天使が語った言葉に注目したいと思います。

天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。

この方こそ主メシアである」。

メシアとは、救い主、キリストという意味です。つまり、イエスさまは真の人としてお生まれになりましたが、天使は、この方こそ、真の神であり、この方によって私たちの救いがもたらされる真の神であると語ります。

先程、教会ではクリスマスと共にイースターが大切だとお話しました。つまり、真の神さまであるイエスさまが、人としてお生まれになったのは、十字架で死ぬため、死から復活して、私たちを救うためでした。

普通の人間は、生まれるときから、殺されることが分かっている人は誰もいません。しかし、イエスさまは、真の神さまだからこそ、生まれるときから、殺されることが分かっておられました。イエスさまが十字架で殺されることにより、神さまを信じるすべての人が救われ、天国に行くためです。

今年もこれからクリスマスの準備を行い、クリスマスを一緒にお祝いしますが、イエスさまが、私たちを救うために、死ぬ覚悟をもって生まれてくださったことを、お覚えいただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、真の神の子どもであるイエスさまが、私たちを救うために、死ぬために人としてお生まれくださいました。ありがとうございます。

これから迎えるクリスマスを、みんなで感謝してお祝いすることができるようにしてください。イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

イエスさまは、ヨセフとマリアの子どもとして、聖霊によってお生まれになりました。ヨセフは大工のヨセフの子として、弟たちがおり、ナザレという小さな町に住んでいたことは聖書に書かれています。イエスさまがどのような生活を送っていたかということは、ほとんど分かりません。

マリアの子として、聖霊によってお生まれになり、しばらくはエジプトに逃げていましたが、その後はナザレで育ちました。その中で、聖書では、イエスさまの少年時代のこと、一箇所記されています。それが、今日の所です。

ユダヤ人は、年に一度、過越祭という祭りのときに、都であるエルサレムに旅をしていました。町中の人たちが一緒に行くのです。聖書では、イエスさまが12歳のときのことが記されています。中学生になった位の年で、お父さん・お母さんにしてみれば、まだ心配の多い年頃です。

みんなでエルサレムに行き、そして帰ります。お父さんとしてのヨセフさんも、お母さんのマリアさんも、イエスさまがみんなと一緒にいるものと思い、確認もしないで、帰ってきていたのですが、探しながら歩いていても、まったく見つかりませんでした。そのため、一日経った後になり、ヨセフさんとマリアさんは、もう一度エルサレムに戻ることとなりました。そして三日目になり、ようやくイエスさまが神殿にいるのを見つけました。

このとき、マリアさんが、イエスさまを叱ります。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して探していたのです」と。マリアさんが怒るのは当然かと思えます。

しかし、このときイエスさまは、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」とお答えになります。イエスさまは、人として生まれながらにして、神の子、神さまそのものでした。そのため、神の働きを行うことは当然だと思っていたのです。特に12歳になり、大人として認められる年齢になっていたのです。そのためイエスさまは、このときから聖書のことを、人々と語り合うことを始めたのではないのでしょうか。

今日の聖句は、最後の節です。

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」。

「知恵が増す」とは、単に頭が良くなるということではなく、聖書のことばが、神から与えられていることを、みんなに分かりやすく話すことができたということだと思います。

イエスさまは、突然、大人になり、最後の3年間、宣教活動を行ったのではなく、少年時代から、人々の前で語っていたのです。

お祈りします。

神さま、イエスさまは、神の子でありつつ、人としてお生まれくださいました。そのため、少年時代から神としてのお働きを行い、宣教の準備を行っていました。

ここにいる子供たちも、小さいときに、神さまと出会い、神さまを信じることができるようにしてください。

イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

イエスさまがお生まれになり、少年時代のことを学びました。イエスさまは少年時代でも、神の子として自覚しており、そのように行動していたことを学びました。

聖書では、イエスさまが伝道活動を始められるまでのことは語りません。

そして、次にイエスさまのことが語られるのは、これから弟子たちを集め、伝道活動を始められるときのことです。このとき、イエスさまのことを預言するために遣わされていた洗礼者ヨハネは、人々に罪を悔い改めをせまり、洗礼を授けていました。救い主であるイエスさまを信じるにより救われることを語っていたのです。

しかしこのとき、イエスさまも、一緒に洗礼を受けられます。本当ならば、イエスさまこそが神さまであり、救い主ですから、洗礼を受ける必要はありません。しかしイエスさまは、ヨハネから洗礼を受けました。それは、イエスさまこそが救い主であり、父なる神さまとの豊かな交わりがあることを、私たちに示してくださるためでした。

そのため、イエスさまが洗礼を受けられ、祈っておられると、天が開けます。どういう状況は、私たちはわかりませんが、聖書にはこのように語られています。

22 聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。

すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、
天から聞こえた。

父なる神さま、そして御子であるイエスさまは、聖霊なる神さまと共に、三位一体の神です。父なる神さまとイエスさまだけの関係ではありません。そのため、イエスさまが洗礼を受けられたときも、父なる神さまとイエスさまとの間に、聖霊なる神さまがつかないでくださり、そして父なる神さま・子なるイエスさま・聖霊なる神さまの間で、豊かな交わりがあることをお示しくされました。

私たちも洗礼を授かります。皆さんの中にも、お父さん・お母さんの信仰によって、すでに洗礼を受けられた方もいますし、まだ洗礼を受けていない方もいます。まだの人は、神さまを信じることができるようになったときに、洗礼を受けて頂きたいと思います。

私たちが洗礼を受けるということは、この父なる神さま、救い主であるイエスさま、聖霊なる神さまとの豊かな交わりの中に入れます。天国における永遠の生命、恵みがあり、喜びがあります。

イエスさまが授かったように、みんなも洗礼を授かり、神さまの交わりに入って頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、イエスさまは父なる神さま・聖霊なる神さまとの交わりの中、洗礼を受けられました。どうか、私たちも、洗礼を受け、神さまの交わりに入ることができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

イエスさまは、ヨハネから洗礼を受け、宣教活動に出られます。イエスさまは、会堂で聖書を読み、教え始められました。そしてイエスさまが語られる説教は、多くの人々からすばらしいと尊敬され始めます。

イエスさまは、子どもの時から育ったナザレにおいても、会堂で聖書を朗読し、そして教えておられます。このとき、イエスさまは、旧約聖書の言葉を朗読します。

18-19 「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。

主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、

目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、

主の恵みの年を告げるためである。」

イエスさまが福音を語るのには、貧しい人たち、捕らえられている人たち、目の見えない人たち、苦しんでいる人たちのためであると語ります。

イエスさまの話しを聞いていた人たちは、イエスさまが小さいときから知っています。そして立派な話しをすることができるようになったことを、誇っていたことでしょう。

しかしイエスさまはさらに、「預言者は、故郷の人たちには受け入れられず、嫌われる」とお語りになりました。聞いていた人たちは、びっくりします。そして、怒り始めます。イエスさまが「故郷の人たちが受け入れない」と語るのには、ナザレの人たちのことを語ったわけではありません。ユダヤ人のことを語っているのですね。

イエスさまが受け入れられないと語った故郷の人とは、「自分は神さまを信じている」、「聖書の言葉を守っている」と語り、他人を見下したり、裁いたりしているユダヤ人・律法主義者たちのことを語っていたのです。

イエスさまは、これから約3年の間、説教を語り、人々に悔い改めを求めて行かれますが、イエスさまが本当に救いたいと思っているのは、最初にも語りましたが、自分には何もない、貧しい、苦しんでいる人、実際に目の見えない人、病気の人であり、神さまにお頼みしなければ、救いはないと思っている人たちでした。

イエスさまは、今、教会に来ているみんなのことを喜んでくださいます。神さまを信じる人、神さまにいつでもお祈りして助けを求める人を、神さまは喜んでくださいます。

自分で何かができることを誇るのではなく、神さまにお祈りして助けてもらうことを喜ぶ人となっていたきたいと思います。

お祈りします。

神さま、イエスさまは、自分たちは神さまを信じていて偉いと誇っていた故郷の人たちに対して、「故郷では受け入れられない」とお語りになりました。私たちも、クリスチャンであることを誇ったり、自分の力で何かをしたことを誇るのではなく、神さまを信じて、いつでもお祈りすることができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン。

クリスマスを含みましたが、新約聖書のイエスさまの話しに戻ります。イエスさまは、神の子でありながらも、人としてお生まれくださいました。それは、私たちを救うために、私たちに代わって罪人として裁きを受け、死を遂げるためでした。

そして、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられることにより、宣教活動を始められます。そして今日の御言葉において語られていることは、弟子をつくることでした。イエスさまには多くの弟子がいましたが、その中でも中心となるのが、12人の使徒と呼ばれる人たちです。そして今日の聖書においては、その中の4名（シモン・ペトロ、アンデレの兄弟、ヤコブとヨハネの兄弟）の漁師を、弟子にする場面です。

彼らは漁師をしていましたので、聖書のことを研究することはなく、あまり知らなかったのではないのでしょうか。しかし、漁師ですから、魚を獲るに関しては、プロ意識を持っていました。彼らが、夜通し、猟をしても獲ることができなかったのに、主イエスが命じられて網を下ろして猟をすると、おびただしい魚を獲ることができました。

神である主イエスに不可能なことはありません。

このとき、シモン・ペトロは、主イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と語ります。

ルカ5:10b

すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。

今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」

そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

ペトロたちにとって、人に説教を語り言い聞かせる、宣教を行うことなど無理だとおもったことでしょう。しかし、主イエスが一緒にいてくださいます。そして、魚がいない湖に網を下ろしなさいと語り、大漁に導くように、主イエスがすべての必要を整えてくださいます。このとき、ペトロも、他の弟子たちも、すべてを捨てて、主イエスに従いました。

イエスさまは、今も、私たちと一緒に居てくださいます。そして必要なときに、私たちの必要をお与えくださいます。だからこそ、私たちもイエスさまを信じて、クリスチャンとして、イエスさまの働きを行うことが求められています。

お祈りします。

神さま、今年一年も、私たちを守り、必要を満たして、恵みに満たしてくださり、ありがとうございます。ペトロたちにおびただしい魚をお与えくださったように、神さまは私たちの必要も満たしてくださいます。

だからこそ、私たちも神さまを信じて、神さまの恵みに満たされて、毎日を歩むことができるようにしてください。

イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

能登半島で非常に大きな地震が起きました。親しい家族が亡くなった方もいれば、避難所で、寒さに震え、何もできないでいる人たちもいるかと思います。私たちは、こうした人たちのことを覚えて、神さまにお祈りすることができます。

さて、今日のタイトルは「幸いと不幸」としました。地震に遭った人たち、まだ戦争の中で苦しんでいる人たちは不幸で、普通に生活できている私たちは幸いなのでしょうか。確かに、神さまがお与えくださった恵みの生活に満足し、幸いに思うことが大切です。

しかし、イエスさまはこのように語られます。

貧しい人々は、幸いである、
神の国はあなたがたのものである。

今飢えている人々は、幸いである。
あなたがたは満たされる。

今泣いている人々は幸いである。
あなたがたは笑うようになる。

イエス様は「貧しい人」「飢えている人」「泣いている人」が幸いであるとお語りになります。自分の力で生きていけない、どうすることもできないことを受け入れることです。それだけではなく、だからこそ神さまを信じて、神さまにお祈りして、委ねる生活することです。このことが大切です。このとき、神さまと一緒に居てくださり、そして本当に必要なものをお与えくださいます。

一方、何の不自由や不満もなく、いくら人から見てもうらやましいような生活をしていても、この恵まれた生活が、神さまがお与えくださった恵みであることを知らない人たちに対して、イエスさまは「不幸である」と語られます。自分の生活に満足して、神さまを求めようとしないこと、神さまを否定することは、神さまは悲しまれます。

そのため、「貧しい方が良いのだ」、「飢えている方が良いのだ」、「泣いている方が良いのだ」と語っているわけではありません。なければ神さまに求め、恵みに満たされていれば、お与えくださった神さまに感謝する生活を行えば良いのです。

毎日の生活の中に、いつも神さまがいるとき、神さまは喜んでくださり、「あなたは幸いである」と宣言してくださいます。だからこそ、いつでも神さまに感謝し、また神さまに委ねてお祈りすることが私たちに求められています。

お祈りします。

神さま、地震のために苦しんでいる人たち、戦争の中、苦しんでいる人たちをお覚えください。助けてください。必要を満たしてください。

また、私たちも、いつも神さまと一緒にであることを感謝し、また神さまにお祈りして委ねることができるようにしてください。

イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

みんなも、きょうだいや友だちと、言い争ったりけんかしたりすることはないでしょうか。こうしたことは、大人になっても、なくなりません。そして、これが国と国との間で戦争となります。今でもロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナの間で戦争が行われていますが、結局のところは、大統領や国の指導者たちの言い争いから起こっています。

私たちは、どうしても自分が正しい、相手が悪いと思ってしまいます。

しかしイエスさまはこのようにお語りになります。

6:27 「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言うておく。

敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい」。

さらに続けてこのようにも語られます。

28 悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。

29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。

上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。

30 求める者には、だれにでも与えなさい。

あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。

31 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。

「こんなことできない」と思うてしまうことが求められています。しかし、私たちは、イエスさまが十字架に架かれたことを考えなければなりません。

イエスさまが十字架にお架かりになったのは、平和な世界をつくるためでした。サタン・そして罪を裁かれ、神さまを信じるすべての人たちが和解・仲直りするためです。

またイエスさまは、なにも悪いことをしていません。イエスさまが十字架に架かるのは、私たちの罪のためでした。ユダヤの人たちの罪のためでした。私たちが罪を犯したとき、その罪の刑罰は死です。十字架に架からなければなりません。この私たちの代わりに、イエスさまが十字架にお架かりくださいました。イエスさまを信じる時、イエスさまの十字架によって、私たちは罪が赦され、救われます。

またイエスさまは、十字架の上で、イエスさまに暴言を語ったりしている兵士に対して、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかしらないのです」ともお語りになりました（ルカ23:34）。

私たちは、イエスさまを信じ、イエスさまによって救われ、平和が与えられています。嫌だな、あいつが悪いと思うことがあったとしても、許して、仲直りすることを、イエスさまは願っておられます。

お祈りします。 イエスさま、私たちはどうしてもけんかしたり、言い争ったりしてしまいます。相手のことを許すことができません。

しかしイエスさまは、敵を愛し、仲直りすることを求めておられます。私たちも、イエスさまに倣い、どんなときにも相手のことを許して、仲直りすることができるようになってください。 イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

皆さんも知っているかと思いますが正月 1 月 1 日、新年早々に、能登半島において大きな地震が起きました。今でも多くの人たちが苦しんでいます。私たちは祈ることしか出来ませんが、祈ることこそ大切です。また、募金をすることもできます。

多くの家が倒れました。今回の地震の場合、昔からある瓦が重たくて、倒れたことが多かったと思います。このことは、29年前に、先生も体験した阪神大震災のときから言われていたことです。「瓦だと危ないから、新しいスレートなどに直した方が良いですよ」と。家を直すには、お金もかかりますし、大変です。なかなかできないのですね。こうしたことが今回の地震において、被害が大きくなった理由の一つにあります。

聖書には、同じ自然災害ですが、水害について語っています。台風が来たり、大雨が続くと、川が溢れ、そして洪水が起きます。柔らかい土の上に家を建てていると、ちょっとしたことで、家が崩れてしまいます。だから、岩の上に家を建てなさいと聖書は語ります。だから今、家を建てたりするとき、地面を深く掘って、硬い岩の上に土台を作ります。その上に家を建てることによって、台風が来ても、洪水が襲っても、大丈夫な家を建てます。

イエスさまは、神さまを信じることも、こうしたことと同じことですよとお語りになります。イエスさまは、聖書により、私たちに語りかけてくださいます。先週であれば、「敵を愛しなさい」と語られていました。簡単にできることではありません。しかし、聖書において語られていることを、信じて、行うとき、平和に生きることができます。そして天国においてイエスさまは、喜んでくださいます。

マタイ6:24 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、
岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」。

ヤコブ1:22 「御言葉を行う人になりなさい。
自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」。

お祈りします。

神さま、地震の災害に遭い、苦しんでいる人を助けてください。

また、私たちが、聖書の言葉を理解することができるようになしてください。

聖書のことばを行うことができるようになしてください。

そして、イエスさまに、「あなたは御言葉を聞いて行った賢い人だ」と褒められるようにしてください。

イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン。

みんなは、学校の先生の語ること、お父さんやお母さんの語ることを守っていますか？人が集まる所では、決め事があり、先生やお父さん・お母さんのように代表となる人の語ること、命令することに、みんなが従わなければ、バラバラになってしまいます。

言われたことを行わなかったときに怒られるのは、バラバラになるからです。

さてイエスさまのところに、100人の部下がいる軍隊の長（百人隊長）が来ました。そして百人隊長の部下の一人が、病気で死にかかっていたのです。そして、イエスさまの所に使いを遣わして、部下を助けに来てくださるように頼みます。そしてイエスさまが、百人隊長のところにいきます。

ところが、イエスさまが来ることが分かった百人隊長は、別の友だちをイエスさまの所に遣わして、さらに語ります。6～8「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくありません。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」

この百人隊長は、イエスさまが神さまならば、命令すれば、部下の病気が癒やされることを信じていたのです。ですからイエスさまもこのようにお語りになります。9「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」

神さまであるイエスさまには力があります。だから、イエスさまが命令されると、病気であっても病気が治り、死んでいたとしても甦ることが可能です。

聖書にはこのように語られています。

イザヤ55:11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も

むなしくは、わたしのもとの戻らない。

それはわたしの望むことを成し遂げ

わたしが与えた使命を必ず果たす。

神であり、病気を癒やす力を持っておられるイエスさまを神さまとして、信じて頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、イエスさまは、言葉で命じることにより、病気の人を癒やすことができました。私たちも、この百人隊長のように、神さまであるイエスさまを信じて、イエスさまの語られる聖書の言葉に従うことができるようにしてください。

イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

イエスさまは神さまです。神さまは、すべてを創られました。何でも行うことができます。イエスさまは、弟子たちを集め、そしてイエスさまご自身が神さまであることを伝えるために、お話ししたり、奇蹟を行ったりしています。

イエスさまはナインという町に行かれました。イエスさまが住んでおられたナザレという町から10km程南東にある町だそうです。イエスさまや弟子たちがこの町に来たとき、葬式が行われていました。やもめの息子が亡くなったからです。やもめですので、ご主人は亡くなっており、一人息子が亡くなることにより一人ぼっちになってしまいます。今のよう年金などない時代ですので、このやもめは、これからどのように暮らしていけば良いのかすら分からない状態にありました。

ですから単に悲しいだけではなく、途方に暮れていたと言って良いかと思います。

このときイエスさまは、この母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われました(13)。そして、近づいて棺に手を触れられると、……イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた(13-14)。

すると、死人は起き上がってものを言い始めた(15)。

イエスさまは、神さまだからこそ、何でも行う力を持っておられます。そして悲しんでいるこの母親の思いを心に留められて、そして息子を死から復活させてくださいました。

今、私たちの目の前にイエスさまが現れることはありません。イエスさまは、十字架の死と復活の後、天に昇って行かれたからです。しかし私たちがイエスさまを神さまとして信じるとき、私たちの祈りは、イエスさまに届けられ、そして父なる神さまに伝えられます。私たちのことをすべて知っておられるイエスさまは、私たちの思いを理解した上で、私たちの祈りを聞いてくださいます。

だからこそ、私たちが神さまを信じて、祈るとき、祈りは必ず聞き届けられます。ときにはいつまで経っても聞かれないとか、別の答えが与えられたということもあります。しかしイエスさまは、私たちにとって一番すばらしい祈りの答えを、私たちのくださいます。

だからこそ、神さまであるイエスさまを信じ、疑うことなく、お祈りしていただきたいと思います。

お祈りします

神さま、イエスさまが真の神さまであり、死んだ人であっても復活させる力を持っておられることが示されました。私たちも、イエスさまを神さまと信じて、何でもイエスさまにお祈りすることができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

みんなは、悪い人が近づいてくれば、近寄らないようにしよう、気が付かれないようにしようと思うかと思います。

しかしイエスさまは、悪いことをして、周りの人たちから嫌われている女の人と一緒に食事をしようとしています。周りの人たちからすれば、「なぜイエスさまは、あの人と食事をするのか」と思ったことでしょう。

なぜ、イエスさまはこの女の人と一緒に食事の席に着いたのでしょうか？

この人は、かつては悪いことをしたかも知れませんが、しかし、今、目の前にいるイエスさまが、神さまであること、救い主であることを知っていました。そのため、他の人たちが行わなかったことを行いました。

44 「この人を見ないか。わたしがあなたの家に入ったとき、あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた。

45 あなたはわたしに接吻の挨拶もしなかったが、この人はわたしが入って来てから、わたしの足に接吻してやまなかった。

46 あなたは頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、この人は足に香油を塗ってくれた。

47 だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」

この女の方は、イエスさまが自分の罪を赦して下さったことを知っていました。だからこそ、感謝して、喜んで、イエスさまに奉仕したのです。

さて、みんなは悪いことをしたことがありますか？ 警察に捕まるようなことをしたことはないでしょう。しかし、きょうだいやお友だちと喧嘩をしたり、嘘をついたりしたことは、あるかと思います。こうしたことのひとつひとつが、神さまの前では「罪」です。だからこそ、私たちは誰も、自分の力で天国に入ることはできません。死に、そして神さまの裁きに遭うことが求められています。

しかしイエスさまは、この女の方の罪を赦して下さったように、私たち、みんなの罪をも赦して下さいます。イエスさまは、そのために十字架にお架かりくださいました。先生は、イエスさまによって罪が赦されたからこそ、喜んで牧師としての働きを行っています。だからこそ、みんなもイエスさまを信じてほしいです。イエスさまを信じて、救いの喜びに生きて欲しいです。

ーヨハ 3:16 イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。

お祈りします。 神さま、この女の方は、イエスさまを信じることにより、罪を赦してもらい、喜んで、イエスさまの奉仕をしました。

私たちも、イエスさまを神さま・救い主として信じるができるようにしてください。そして喜んで教会に来ることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

今では、悪霊に取りつかれている人はいません。しかしイエスさまの生きていた時代には、悪霊に取りつかれ、服も着ることなく、墓場で住んでいる人がいました。墓場で住んで、裸で騒ぎまわっている人だから、誰もが、彼を避けていました。そして、彼は、暴れまわるので、鎖で繋がれていました。暴れないか、いつでも見張りの人が付いていました。

これだめ滅茶苦茶な人ですが、この悪霊に取りつかれた人は、イエスさまが来られると、すぐに分かります。悪霊であるサタンは、神の子であるイエスさまが自分を滅ぼしに来ていることを知っていたため、イエスさまが近づいてきた時に、大声で語ります。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。」近くにいた人たちはびっくりしたことでしょう。

イエスさまがこの人に「名はなんというか」とお尋ねになると、「レギオン」と答えます。レギオンとは、ローマの軍隊の呼び名で、一つの軍団が6000人程であったといわれています。多くの人がいることを語ります。つまり彼には、6000・多くの悪霊が入っていることを物語る名前でした。

このときイエスさまに、悪霊に対してこの人から出ていくように命令されました。このとき、近くにたくさんの豚の群れがいたので、悪霊どもは豚の中に入ることを願うと、イエスさまも、それをお許しになりました。悪霊に取りつかれた豚たちは、近くの崖を下って行き、次々とおぼれ死んでいきました。

このとき、元々悪霊に取りつかれていた人は、正気に戻り、普通の人のように、イエスさまの話を聞くために、イエスさまの足元に座っていました。

周囲の人たちは、またもやびっくりしたことでしょう。

このときに、イエスさまがこの人に語ります。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。

イエスさまは、この男の人から多くの悪霊を追い出してくださったように、私たちに襲い掛かる罪から守ってくださいます。そして私たちは、大変なとき・苦しいとき、いつでもイエスさまにお祈りすることができます。サタンはイエスさまのことを知っているので、私たちが神さまを信じて、イエスさまにお祈りしていると、サタンは私たちから離れていきます。そしてイエスさまが、私たちを守ってくださいます。

だからこそ、どのようなときにも、神さまであるイエスさまを信じ、イエスさまにお祈りして頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、イエスさまがこの人から悪霊を追い出してくださったように、私たちを守り、私たちに近づいてくる罪の誘惑から守ってください。そしていつでも私たちが一緒にいてくださる神さまにお祈りすることができるようにしてください。

イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン

イエスさまは、12人の弟子の中から、ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて山に登られました。お祈りをするためです。イエスさまは普通、一人で、お祈りをされていますが、このときは弟子たちを連れて行きました。

しかしこのとき、弟子たちは驚きます。いつも見ているイエスさまとは異なり、服が真っ白に輝いていたからです。そして、他には誰もいないはずなのに、イエスさまは別の二人のひとと話しをしています。旧約聖書にでてくるモーセとエリヤです。そしてイエスさまは、これからエルサレムに行き、十字架に架かれますが、そのことを、三人で話していました。

つまりイエスさまは、天国における会話をここで行っていたのです。

弟子たちは何が起きているのか、わからなかったことでしょう。ペトロは眠たかったのですが、イエスさまが光り輝くようでしたので、「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」と語ります。

ペトロは、自分でも何を言っているのか、わからなかったのですね。

このとき、雲が現れ、雲の中に入り、はっきりと見えなくなります。そして、雲の中から声が聞こえます。父なる神さまの声です。

すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。

ペトロたちは、何が起ったのかまったく理解することができませんでした。こんなこと、誰に話しても、理解してもらえません。そのため、ここで見たとを、ずっと誰にも話すことができませんでした。

しかし、ペトロたちは、このときのことを理解するときがきます。イエスさまが十字架の死から甦られたときです。イエスさまが真の神さまであり、自分たちは、天国での会話を、前もって見る事ができたことを理解できたからです。そして、イエスさまがイエスさまを信じるすべての人を救うために、十字架の死と復活を遂げてくださったことを理解し、信じる事ができました。

だからこそ、このときの出来事が、聖書に書き残されたのです。イエスさまが、神さまの御子であり、真の救い主であることを、お友だちに話しても、信じてくれないかもしれません。しかし私たちは、このときペトロとヨハネとヤコブが見たこと、そしてイエスさまが十字架の死を遂げ、その後三日目に甦られたことを証しています。だからこそ、ペトロたちがイエスさまが救い主であることを信じたように、私たちもイエスさまこそが私たちの救い主、神さまであることを信じる事が求められています。

神さま、イエスさまが真の救い主であり、今も天国におられることを、私たちが信じる事ができるようにしてください。そしてイエスさまが、私たちも救い、天国へと連れて行ってくださることを信じる事ができるようにしてください。

イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

イエスさまは、ペトロやヨハネといった12人の使徒を始めとして多くのお弟子さんがいました。そして今、イエスさまを信じる私たちも、イエスさまの弟子とされています。

しかしイエスさまは、イエスさまの弟子として、どのような人であれば良いのか、ということをお語りになります。

イエスさまを神さまとして信じているのだから、それで良いではないか。毎週、教会に来ているのだから、それで良いではないか。と思われるかも知れません。しかし、イエスさまを信じて、神さまによる救いに入れられるとは、条件付きであってはなりません。

つまり、今日は用事があるから教会に行けないけど、来週は何もないから教会に行く、と言うことではダメなのです。今日の聖句でも、このように語られています。

イエスはその人に、「^{すき}鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

^{すき}鋤と言っても分からないかと思いますが、農作業を行うときの道具です。つまり、農作業を行い、自分の食べる食料を確保してから、神さまを信じる、教会に行くと言うことではないのです。イエスさまを信じること、クリスチャンとなることは、物事のついでであってはなりません。条件付きであってはなりません。

イエスさまは、父なる神さまの子どもとして、真の神さまでした。この真の神であるイエスさまが人としてお生まれくださいました。それは、私たちの罪を赦し、救うために、イエスさまご自身が十字架の死と復活を遂げて、死に、死に打ち勝って甦るためでした。

イエスさまは、天国において、神さまの子どものままでいても良かったのです。しかし、あえて人としてお生まれくださいました。私たちのために十字架の苦しい道を歩んでくださいました。肉の死まで経験してくださいました。これは、私たち、みんなを救うためでした。

イエスさまが私たちのために、犠牲を払ってくださいました。そうであるならば、私たちも、イエスさまを信じることを一番大切にしなければなりません。そうであるならば、イエスさまを信じること、教会に来て、神さまを礼拝することを、第一にしなければなりません。もちろん、教会に来ることができない日もあるでしょう。このことを悲しみつつ、神さまにお詫びしつつ、次の週に、教会に来ることを願うことが大切です。

イエスさまが私たちのことを大切に思い、十字架にお架かりくださったように、私たちもイエスさまを信じて、イエスさまのこと、神さまを礼拝することを一番大切にして、イエスさまの語られる聖書の言葉に従って、歩んでいただきたいと思います。

神さま、イエスさまは私たちを救うために、人となり、十字架の死を遂げて下さいました。イエスさまが私たちを愛して下さいるように、私たちもイエスさまを愛して、イエスさまを第一にすることができるようになってください。

イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

イエスさまは、12人を使徒としたばかりか、イエスさまに従ってくる多くの人たちを弟子としました。神さまを信じること、クリスチャンとなるということは、イエスさまの弟子となることです。

イエスさまは、弟子であるクリスチャンを、派遣されます。それは、イエスさまのことを証しすること、神さまによる救いを伝えることです。みんなの中には、教会に行っていることを、お友だちに話すのが恥ずかしいと思っている人もいるかもしれません。クリスチャンだということを、隠しておきたいと思う人もいるかと思います。たしかに、日本ではクリスチャンが非常に少なく、お友だちと違うことを隠したいと思う人がいるかと思います。人と違うことをしていると、目立ってしまうからです。

だから、日曜日に遊ぼうと誘われても、「日曜日の朝はダメなの」ということはできても、「教会に行っているからダメなの。私、クリスチャンなの」とは、なかなか言えないかもしれません。

しかし、教会に来ること、クリスチャンになることは、悪いことをしているのでは決してありません。多くの人たちが、神さまがいるのかどうか分からない、と思っている中、神さまがいて、私たちを救って下さる、イエスさまが死から復活して下さったように、神さまを信じる私たちも復活して、いつまでも天国で生きることができることを知っているからです。

だからこそ、いつでも誰にでも、クリスチャンだ、一緒に教会に行こうと語ることはできないかも知れませんが、お友だちから、「日曜日に遊ばない?」、「クリスチャンなの?」、「教会って、何をやる所なの?」、と聞かれた時に、いつでも、「楽しいところだよ、一緒に教会に行こう」と言えたらいいなと思います。

「自分が伝えなければならない」と思うと、しんどくなってしまう。嫌になることもあるかもしれません。しかし、忘れてはならないことは、いつでもイエスさまと一緒にいてくださいます。それは、礼拝をしているとき、教会にいたときだけではなく。みんなが家に帰っても、学校や幼稚園にいても、神さまは聖霊をとおして、いつもみんなと一緒にいてくださいます。そして守って下さいます。

だからこそ、勇気をもって、お友だちに「教会に来ない」と声をかけることができたらいいなと、思っています。

暗証聖句を確認します。「収穫は多いが、働き手が少ない」。

だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主お願いなさい。

お祈りします。

神さま、神さまがいつも一緒にいてくださり、私たちを守って下さり、ありがとうございます。だからこそ、お友だちに、神さまのこと、教会のことをお話しする勇気をあたえてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

子どもメッセージ267 「祈りに応える父」 ルカ福音書11章1～13節 2024年4月7日

先週、イースターをお祝いしました。イエスさまが十字架の上で死を遂げられてから、三日目の朝に復活されたからです。「人は死んだら終わりだ、復活することはない。ゲームの世界だ」と、みんな思っています。

しかし、イエスさまは復活されました。それはすべてを支配しておられる神さまだからこそ可能でした。

このイエスさまは今、復活され、天に昇っておられます。だから、私たちは、今、イエスさまと、直接会うことはできません。

しかし神さまは、いつでも私たちと一緒にいてくださいます。聖霊なる神さまが、今、ここに私たちと一緒にいてくださり、イエスさま、父なる神さまとをつないでくださいます。

だからこそ、私たちは、神さまにお祈りすることができます。聖霊なる神さまは、目に見えませんが、聖霊をとおして、神さまに聞き届けられるからです。

私たちは神さまにお祈りするとき、どうしても「お願い」することだと思っています。

そこで、わたしは言うておく。

求めなさい。そうすれば、与えられる。

探しなさい。そうすれば、見つかる。

門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

だから、神さまにお願いすれば良いのです。

しかし、お祈りには4つの種類があります。

- ①神さまを讃美すること。
- ②神さまからの恵みに感謝すること。
- ③お願いすること。
- ④執り成し（人のためにお願いすること）

神さまはお友だちではないのだから、お願いばかりではなく、讃美し礼拝すること、毎日の神さまからの恵みに感謝することも忘れてはなりません。

また、苦しんでいる人のためにお願いすることも大切です。元旦に能登で地震がありました。また先週は台湾でも地震がありました。ウクライナやパレスチナ（ガザ）では、今も戦争が続いています。こうした苦しんでいる人たちが、助けられ、平和が来るようにお祈りすることも大切なことです。

神さまはいつも私たちと一緒にいてくださいます。だからこそ、毎日、神さまにお祈りしましょう。

お祈りします。神さま、いつも私たちと一緒にいてくださり、見守っていてくださり、ありがとうございます。だからこそ、私たちも、いつでも神さまを信じて、神さまにお祈りすることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

小学生のお友だちは、お金が大切だということを知っているかと思います。良い学校に行き、いっぱいお金を稼げるようになりたいと思っている人もいますか？

イエスさまの所に一人の人がやってきます。親が亡くなり、遺った財産を兄弟から分けてもらいたいという相談です。このときにイエスさまはお語りになります。

「食欲に注意を払い、用心しなさい」 食欲とは、がめつい、欲深いという意味です。

そしてイエスさまはたとえ話を話し始めます。16～20 「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまひ、こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた」。

このお金持ちが間違ったのは、これから楽をするために、さらに大きな倉を建てようとしたことです。お金を稼ぐ・農作物を収穫するというのは、自分の力で行っているのだと思っているかと思いますが。たしかに努力が実ります。

しかし、大切なことは、神さまの許しがなければ、お金を稼ぐことも、多くの農作物を収穫することもできません。いっぱい収穫物を手に入れる、多くのお金を手にするのも、神さまが恵みによってお与えくださったものです。そればかりではありません。私たちの生命も、神さまが毎日お与えくださっています。今日は、みんなが元気に来ることができましたが、体調不良のときもありますよね。元気な体、病気が回復するのも、神さまがお与えくださった恵みです。

だからこそ、与えられた収穫物は感謝して用いれば良いのであり、必要ならば、持っていない人を助けるために用いることが求められています。自分のものが減ったと悲しむ必要はありません。私たちのすべてを知っておられる神さまは、私たちが必要だと思っていれば、明日も神さまが備えてくださいます。

そして、イエスさまは、自分が楽をするために新しい倉を作ろうとした人に対して、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ」とお語りになりました。

神さまはいつもみんなと一緒にいてくださいます。そして必要なものを満たしてください。だからこそ、与えられたものに感謝して用いれば良いのです。多くのものがあれば、困っている人に分ければ良いのです。明日は、また、神さまが恵みで満たしてください。いつも神さまと一緒にいてくださり、与えられた恵みに感謝することが大切です。

お祈りします。神さま、神さまがいつも一緒にいてください、私たちに必要なものをお与えくださり、ありがとうございます。そしてがめつくなることなく、毎日、神さまの恵みに感謝することができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によりお祈りします。アーメン

今、犬や猫のペットを飼うことがブームとなっています。ペットを飼っている方はいるでしょうか？ 先生も昔、猫を飼っていました。可愛いですよね。今は残念ながら飼っていませんが、可愛がれば懐いてくれるし、余計に可愛くなります。今では、ペットを飼っている人たちは、家族の一員のようになっているのではないでしょうか。

花を栽培している人たちも同じかと思います。手入れをすればするほど、綺麗な花を咲かせます。教会の前の花壇も手入れしてくださっているために、花を咲かせています。しかし、これらの花の多くは、自分の力で素晴らしい花を咲かせることは難しく、人が手入れすることにより、綺麗な花を咲かせます。花を栽培する人、見る人が、花を好きだからこそできることです。

ペットでも、花でも好きだ・愛することにより、大切に育てることをします。私たちは家族で暮らしています。みんなも、お父さん・お母さん・家族の人たちに愛されているかと思います。

しかしそれ以上に、天におられるイエスさまがみんなのことを愛していてくださっています。みんなが学校に行ったりして、神さまを忘れているときも、一人ひとりのことを見守っていてくださり、またお祈りしてくださっています。

だからこそ、自分のためにお金を儲けて、大きな蔵を作る必要はないのだと、先週、イエスさまは語られました。今日、必要なものを、神さまが今日、お与えくださいます。だからこそ、多く与えられたのであれば、貯め込む必要はなく、困っている人に施すべきだということでした。

またイエスさまは、このようにお語りになります。12:28-30 「信仰の薄い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである」。

さらにイエスさまは語ります。12:31 「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる」。神の国とは、神さまのおられる天国のことです。神さまを信じ、天国を求めれば良いのです。このとき私たちは神さまに祈ります。そうすれば、神さまは、私たちに必要なものをすべてお与えくださいます。このとき、神さまは私たちに必要な宝を、天に蓄えてくださり、救いの喜びに満たしてください。

お祈りします。

神さま、私たちはどうしても今日、何を食べようか、何を飲もうかと思ってしまう。しかし、私たちを愛してくださる神さまが、私たちに一番必要な食べ物も、飲み物も、お与えくださることに感謝します。神さまを信じて、いつも神さまにお祈りする生活ができるようにしてください。 イエスさまのお名前によりお祈りします。アーメン

私たちは今、テレビやネットを見ると、すぐに明日の天気を確認することができます。そのため、空を見て、明日の天気を考えることがなくなってきたかと思います。

しかし神経痛を持っている人だと、古傷が痛むと、雨が近づいていることが分かります。また空を見ても夕焼けが綺麗だと明日は晴れだ、朝焼けがあるとその後雨が降ることが分かります。どのような雲が出ているか、雲の流れる早さなどでも確認することができます。

子どもたちには難しいかも知れませんが、自然には法則があります。毎日、空を見ていくことにより、はじめの頃は分からないのですが、だんだんと、次日の天気が分かるようになるようになってきます。勉強するのでも同じですね。繰り返し、繰り返し行うことにより、はじめは分からなかったことが、だんだんと理解できるようになります。

聖書を読むことも同じです。聖書を読み、聖書を学んでいても、自分には関係のないことだと思っている人もいるかと思います。しかし聖書を読み続けることによって、何が良いことで、何が悪いことかがだんだんと分かってくるようになります。

毎週、教会に来ることは大切なのですが、このときに聖書を読み続けること、聖書に何が語られているのか、メッセージを聞き続けることが大切です。いつも聖書を読み続けることによって、悪いことをする人たちの誘惑・企みが分かってくるようになり、引っかからないようになってきます。

イエスさまは、「あなたがたは、何が正しいかを、どうして自分で判断しないのか」とお語りになります。みんなも、どうしたら良いのだろうか、と考えるなければならないことがあるかと思います。毎週聖書を読み、メッセージを聞いていれば、だんだんと自分が今、どのように判断して、行動すれば良いのか判断できるようになります。

このときに大切なことは、ただ聖書を読むだけではなく、このときに頭で考えることです。イエスさまは私に何を語ろうとされているのだろうか、何が正しいことであり、何が誤ったことなのかを理解し、何が起こっても、自分で判断できるようにすることが大切です。

そしてもう一つ大切なことがあります。自分でどうすれば良いのか分からないとき、神さまにお祈りしてください。イエスさまは、聖霊をとおして、いつもあなたと一緒にいてくださいます。そして、助けてくださいます。

だからこそ自分一人で苦しむのではなく、どんなときにも、神さまにお祈りしていただきたいと思います。神さまは、一番大切な答えをあなたにお与えくださいます。

お祈りします。

神さま、明日の天気が分かるようになるように、私たちも、問題が起こり、困ったときに、神さまにお祈りし、神さまの言葉により、判断して、答えを出すことができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

子どもメッセージ271 「安息日の癒やし」 ルカ福音書13章10～17節 2024年5月12日

私たちは、週の一番はじめの日である日曜日に礼拝のために教会に集っています。イエスさまが十字架の死から三日目に復活されたことを記念するためです。

しかし、イエスさまの十字架の前は、週の最後の日、土曜日が安息日でした。神さまを覚えて礼拝する日です。そしてイスラエルの人たちは、神さまが「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。」(出エジプト20:8～10) と語られていることから、一切、仕事をしませんでした。決められたことは、例外を認めず、実行する人たちであり、律法主義と呼ばれます。

イエスさまは、この安息日に、18年間も病気であり、腰が曲がったままの人を見て、そしてイエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した(ルカ13:11-13)。

ユダヤ人たちは、イエスさまが病人を癒やされたことに対して、「安息日はいけない」と語り、仕事をすることを非難します。

この話し合いは、非常に大切です。私たちも日曜日毎に教会に来て、神さまを礼拝します。そして神さまもこのことを求めておられます。しかし、何が何でも、日曜日に教会に来なければならないとイエスさまは語られません。イエスさまがこの会堂に来られたのは、初めてではないでしょうか。この女性に会ったのは初めてのことです。この女性にとって、生きるために大切なことは、病気が癒やされることです。そうすれば、これから働くこともでき、また、毎週、積極的に神さまを礼拝することもできるようになります。

安息日、今の主の日である日曜日は、神さまを讃美する日ですが、神さまを礼拝する私たちが喜びで満ちていなければ、神さまを讃美することはできません。そうであるならば、安息日であっても、今、病気が癒やされることが、この女性にとって必要なことでした。

イエスさまは、この女性にとって、一番大切なものを、今、病気を癒やすことによって、お与えくださったのです。

みんなにとっても同じことです。日曜日に神さまを礼拝するために教会に来ることを、神さまは心から喜んでくださいます。そして休むと、神さまは悲しまれます。

しかし、病気であったり、大切な試験があったりするとき、休んでも構わないと思います。「神さま、今日、礼拝に出席することができず、ごめんなさい」。このようなお祈りを心から行うとき、神さまは、答めることはありません。

お祈りします。

神さま、今日も、私たちが教会に来て、神さまを礼拝することができ、ありがとうございます。しかし私たちは、教会に来ることができないこともあります。こうした日も、神さまを覚えてお祈りすることができるようにしてください。

そして、教会に来ることができた時は、喜びをもって、神さまを礼拝することができるようにしてください。 イエスさまのお名前によって、お祈りします。アーメン

今日はペンテコステです。変な名前かも知れませんが、50日目のという祭りの日です。つまりイエスさまが、十字架の死から甦られたのがイースターでしたが、今年は3月31日で、その日から50日目があります。

そして教会では、イエスさまが天に昇られ、もう弟子たちの前にはいなくなったため、神さまは代わりに聖霊をお送りくださいました。ペンテコステとは、聖霊が与えられたことを、一緒に喜ぶ日です。

私たちは、聖霊なる神さまが、今も私たちと一緒にいてくださるからこそ、私たちの信仰が守られ、お祈りがイエスさまをとおして父なる神さまに届くことを信じることができます。

しかし、私たちは今、イエスさまと直接会うことはできません。聖霊なる神さまは目に見えないため、「神さまなどいない」という人たちも少なくありません。「神さまなどいないのだから、教会に行く必要はない」という人たちもあるでしょう。

しかし、イエスさまがサタンの誘惑に遭ったとき、イエスさまはサタンに対して、このように答えられました。

『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」と。

神さまを信じていない人たちは、いろんなことを語り、神さまを否定します。しかし、神さまは、聖書をとおして、神さまがおられること、神さまがイエスさまをとおして救いをお与えくださったこと、今も聖霊なる神さまが私たちと一緒にいること、私たちの祈りはすべて神さまが聞き届けてくださること、を教えてください。

だからこそ、私たちは、他の人たちが神さまのことをどのように言っているとしても、そのようなことに耳を貸す必要はありません。そうではなくて、神さまは聖書を通して、私たちに神さまを信じることの喜びをお語りくださいます。だからこそ、主なる神さまを信じて聖書の言葉に聞くことが求められています。

お祈りします。

神さま、私たちはイエスさまを直接見たり、話したりすることはできませんが、その代わりに、聖霊なる神さまをお与えくださり、ありがとうございます。そして、いつでも、聖霊なる神さまを通して、イエスさまにより父なる神さまにお祈りすることができ、ありがとうございます。

だからこそ、私たちは主なる神さまを信じて、聖書の御言葉に聴き、いつでも神さまにお祈りすることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

子どもメッセージ273 「悔い改めねば滅びる」 ルカ福音書13章1～9節 2024年6月2日

おはようございます。今日も、みんなが教会に来て、神さまを礼拝することができ、感謝します。「日曜日くらい、ゆっくりしたい、友達と遊びたい」と思っている人もいるかも知れませんが、それよりも教会に来ることを、大切に思ってください、ほんとうに嬉しいです。

ところでみんなは、「自分は良い人だ」と思っているのでしょうか？ 悪いことをしたことはないのでしょうか？

きょうだいやお友だちと喧嘩をしたり、いじめたりしたことはないのでしょうか？

お父さん・お母さん・家族の人に嘘をついたことはないのでしょうか？

バレていないだけで、誰でも、そのようなことの一つや二つはあるかと思います。

家族の人やお友だちなどに見つかっていないそのような悪いことを、実はすべて知っている人がいます。それは今は天におられるイエスさまです。神さまであるイエスさまの前では、誰も嘘を付きとおすことはできません。そして神さまは、嘘を付くこと、悪いこと、罪を犯す人を、赦すことができません。神さまは完全に正しい（義・聖・真実な）人だからです。

バレていなくても、神さまの御前では、罪がすべて明らかにされます。そしてこの罪は、死に値します。誰一人、生き延びることはできません。

イエスさまは、私たちを救うために、この世に来て下さいました。私たちに代わって十字架に架かって下さったのですが、みんなに一つだけ条件を出されました。

それは、イエスさまを神さまであると信じて、自分の罪を認めること・神さまにご免なさいと謝ることです。教会では「悔い改める」と語ります。

そのため、イエスさまもこのように語られています。

13:5 「言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

他の人が悪いことをした時、噂したりすることもあるかと思いますが、あなたも神さまの前で悔い改めなければ、同じように神さまに裁かれ、救われることはありませんよと、語られています。

いつも一緒にいてくださるイエスさまは、あなたのすべてを知っておられます。「嘘を付いたことはない」、「悪いことをしたことはない」と語るのではなく、「神さま、イエスさま、ごめんない。私は悪いことをしました。嘘を付きました」と、語ることを望んでおられます。

お祈りします。

神さま、私たちは、人には隠しておきたい嘘や悪いことを行っています。ご免なさい。イエスさまが、私たちの代わりに十字架に架かり、私たちの罪を赦して下さいたことに感謝します。ありがとうございます。

だからこそ、イエスさまを神さまと信じて、いつでもイエスさまにご免なさいと言えるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

イエスさまは、ユダヤ人が誤りを正さないために、ユダヤ人たちの罪を指摘したことにより、命が狙われていました。そのため、ファリサイ派の人々の中にもイエスさまを慕っていた人たちがいましたが、彼らが、「逃げて下さい」と語ります。

私たちは、危ないことが分かっているならば、そこに行くことを避けます。逃げます。

しかしイエスさまは、逃げることなく、これからエルサレム向かい、エルサレムで捕らえられて、十字架に架かることを伝えます。なぜならば、神の子であるイエスさまが、人としてお生まれになられたのは、逮捕されて十字架に架かり死ぬためだからです。死ぬばかりか、死んでから三日目の朝に甦り、死に打ち勝つためでした。そのため逃げることはせず、エルサレムに向かわれます。

このとき同時に、イエスさまを殺そうとしている人たちのために語られます。13:34-35
「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられる」。

イエスさまは、イエスさまご自身を殺そうとしている人たちを集め、救いに導こうとされています。しかし、最後までイエスさまの声に耳を傾けて信じようとしなかった人たちは、裁かれ、滅ぼされます。

しかしイエスさまは、最後の最後まで、ユダヤ人であっても、私たちの周りの人たちであっても、救おうとされています。

イエスさまは、十字架の死と復活の後、天に昇って行かれました。しかしそれで終わりではありませんよね。再び来られ、そしてキリスト者を救い、神の国・天国へと導いて下さいます。2000年経っても、まだイエスさまは来られません。いつになっても、イエスさまは来られないのでしょうか？

イエスさまは、神さまが救いへと予定しているすべての人たちが、教会に来ること、神さまを信じることを待っておられます。そのすべての人たちが教会に集まったとき、イエスさまは再び来られ、そして神の国が完成します。

Ⅱペトロペト3:9 ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。

お祈りします。

主なる神さま、私たちを救うために、イエスさまは逃げることなく、エルサレムに行き、十字架にお架かりくださったことに感謝します。また、今まだ、イエスさまが来られていませんが、神さまを信じる最後の人が来るまで、じっと待っていて下さり、ありがとうございます。神の民がみんな集まり、一緒に天国に行くことができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

イエスさまは一つのたとえ話を行います。2人兄弟が、お父さんと一緒に働いていました。お父さんは金持ちで、元気な内にとの思いで、二人に財産を分けました。

すると弟はすぐに家を飛び出し、遊び回りました。お金など、すぐに無くなっていきます。ですからお金を持っている時には、多くの友達ができて、一緒に遊んでいましたが、お金がなくなると、弟の前からいなくなり、弟は一人ぼっちになりました。

そんなとき、ひどい飢饉が襲いかかり、誰もが食べるのに大変なときが来たのですが、このとき弟は豚の餌を食べてでもお腹を満たしたいと思ったのですが、それすらも誰もくれません。

そんなとき、弟はお父さんのことを思い出しました。15:17～19 彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』

そして弟は、お父さんのところに戻っていきました。弟が帰ってくると、まだ遠くにいたのですが、お父さんを見つけました。そして走り寄ってきて首を抱き、接吻しました。

このときお父さんは、弟に一番良い服をもって来させ、手に指輪をはめ、足に履き物を履かせました。このときに、お父さんは、弟に対してこのように語ります。

15:24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。

主なる神さまは、このお父さんのようです。みんなが、まだ教会に来ていないときから、あなたを待っていて下しました。そして、一人ひとりが教会に来たとき、喜んで向かい入れてくださいます。そして神さまを信じたとき、ごちそうでお迎えしてくださいます。

聖餐式がありますが、信仰告白した人が、一緒に食します。天国に行くと、すべてのクリスチャンと一緒に食事に与ります。そして神さまは、みんなが天国に来たことを、喜んでくださいます。

だからこそ、この弟がお父さんのところに戻ってきたように、みんなが教会に来たことを神さまは喜んでくださいます。また、まだ教会に来ていない人たちが、教会に来ることを、神さまは、今も待っていてくださいます。

お祈りします。

神さま、お父さんが弟がいなくなってから、ずっと弟の帰りを待っていてくださり、そして帰ってきたとき、喜んで迎え入れてくださったように、神さまが私たちが教会に来ることを待っていてくださり、ありがとうございます。

そして、これから教会に来た人たちを、神さまと一緒に喜んで迎え入れることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

子どもメッセージ276 「主の十字架」 ルカ福音書23章1～38節 2024年6月30日

新約聖書のイエスさまのお話を続けてきました。イエスさまは、真の神さまですが、逮捕されて、十字架に架かるために、おとめマリアからお生まれになり、そしていよいよ、今日は、十字架に架かれる場面を確認します。

イエスさまは、12人の弟子たちと共に、最後の晚餐と一緒に食された後、3人の弟子たちを伴って山に行き、祈っていました。このとき、イスカリオテのユダに裏切られて逮捕されました。そして一晩中、裁判が行われ、そして十字架に架けられることとなりました。

イエスさまは、ゴルゴタという丘の上で十字架に架けられます。このとき、丘の上では、イエスさまを真ん中に、もう二人の犯罪人が十字架に架かることとなっています。

十字架に架けられたイエスさまは、このように語られました。

「父よ、彼らをお赦してください。

自分が何をしているのか知らないのです。」

彼らとは、イエスさまを十字架に架けたユダヤ人やポンティオ・ピラト、兵士、さらには十字架を見守っている民衆と言って良いでしょうか。実は、隠れるように見ていた弟子たちも含めても良いかと思います。

ここにいるすべての人たちは、イエスさまは逮捕されて、ユダヤ人に負け、そして殺されるのだと思っていました。

しかし、最初にも語りましたとおり、真の神の子であるイエスさまは、生まれる時から、十字架に架かって死ぬためにお生まれになりました。だからこそ、イエスさまが十字架に架かることは、何も負けではありません。

つまり、来週、改めて学びますが、イエスさまは十字架の上で、死を遂げら、息を引取られますが、墓に葬られてから3日目の朝に、甦られます。死に対して勝利して下さい。罪に対して勝利して下さい。そしてサタンにも、打ち勝って下さい。

このことのために、イエスさまは、今、十字架に架かり、苦しまれています。このときに、イエスさまは「彼らは自分が何をしているのか知らないのです」とお語りになりました。

私たちは、イエスさまが、死から復活し、甦って下さったことを知っています。だからこそ、敗北者ではなく、私たちに救いをもたらす、真の勝利者として、イエスさまは十字架に架かられていることを、理解していただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、イエスさまが、私たちを救うために、十字架に架かり苦しみ、死を遂げられたことを覚え、心より感謝します。どうか私たち一人ひとりが、イエスさまの十字架に感謝して、救いの喜びをもって、毎日を歩むことができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

新約聖書のイエスさまのお話を続けてきました。イエスさまは、真の神さまですが、逮捕されて、十字架に架かるために、おとめマリアからお生まれになり、そしていよいよ、今日は、十字架に架かれ、苦しまれ、そして死を遂げられました。

弟子たちは、みんながっかりしています。ユダヤ人たちとの勝負に負け、イエスさまは負けて死んでいった、と思っている人も少なくないかと思います。そして、イエスさまは、真の神ではない、と思うのです。

それでも女性の弟子たちは、イエスさまを丁重に葬るために、安息日が開けた朝早くに、墓に向かいます。彼女たちも、イエスさまが復活することを信じていたわけではありません。ただ、死を遂げられたイエスさまを丁重に葬りたいとの願いでした。

しかし、いざイエスさまの墓に入ると、葬られているはずのイエスさまが見当たりません。そして、輝く衣を着た二人の人と出会います。そして二人は語ります。

5 「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。

6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。

：

7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、

三日目に復活することになっている、といわれたではないか」と。

イエスさまは、確かに、十字架の死と、死から三日目の復活をお語りになっていました。しかし、弟子たちも、女性たちも、イエスさまが何のことを言っているのか分からず、信じることなどできませんでした。

しかし、イエスさまが十字架に架かって死を遂げられたこと、そして墓に葬られたことを振り返りながら、もう一度、イエスさまが語られた言葉を聞くと、イエスさまを神として信じるとはどういうことであるか、ということが理解できたのです。

ですから婦人たちは、復活されたイエスさまをまだ見ていなかったにもかかわらず、弟子たちの所に帰り、このことを伝えたのです。

聖書には、彼女たちの名が記されています。「マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たち」と。

婦人たちの話を聞いた使徒たちは、その話を信じるのができませんでした。しかし、この後、復活されたイエスさまは、使徒たちの前に、そして信じた女性たちの前に現れてくださり、復活が真実であったことをお示し下さいました。

私たちは、見ることによって信じるのではなく、神さまが私たちにお語りくださった聖書の言葉を信じることによって、神さまによる救いに入られます。女性たちが信じたように、私たちも、イエスさまの復活を信じることようになっていただきたいと思います。

神さま、神の御子であるイエスさまは、十字架で死を遂げられ、墓に葬られましたが、三日目の朝に甦ってくださいました。女性たちが信じたように、私たちもイエスさまの復活を信じて、神の子どもとして、歩むことができるように、お導きください。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

イエスさまは、十字架に架かり、死を遂げられ、墓に葬られましたが、死から三日目の朝に甦られました。死に打ち勝ち、サタンにも打ち語られたのです。先週は、イエスさまが葬られたはずの墓に、イエスさまの遺体はなく、二人の天使が、イエスさまの復活を語り、墓に來た婦人たちは、イエスさまの言葉を思い出して、信じたことを確認してきました。

このときはイエスさまの姿は見当たりませんでした。その後、婦人たちも、弟子たちも、復活されたイエスさまと出会いました。

今日のタイトルを「主の顕現」としました。難しいことばですが、「はっきりと姿を現すこと」です。

今日のお話に出てくる二人のでした、12人の弟子（使徒）ではありませんでした。一人の名前がクレオパであったことを聖書は語ります。クレオパともう一人の弟子は、イエスさまが十字架で死んで、葬られてしまったため、エマオという街に向かっていた。自分の故郷だったのではないのでしょうか。片道12kmほどの距離です。

この二人がエマオに向かって歩いていたとき、復活されたイエスさまも、一緒に歩き始めます。二人は、イエスさまが十字架で死んだこと、そして婦人たちが遺体を見つけずに戻ってきて「イエスさまが生きておられる」と告げたことを語り、自分たちには信じられないことばかりであることを語っていました。

この後、復活されたイエスさまは、二人の弟子たちに聖書の話を聞かせます。「メシアは苦しみを受けてから栄光に入るはずではないか」とも語ります。

そして二人とイエスさまは、泊まるために宿屋に入り、一緒に食事をとることになりました。

24:30 イエスさまはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

このとき、二人の弟子は、ここにいるのが、復活されたイエスさまであることがはっきりと分かりました。

24:31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

24:32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

十字架に架かる前のイエスさまと復活された後のイエスさまは、少し様子が違ったのでしょうか？ 死んだイエスさまがここにいるはずがないとの思い込みがあったのでしょうか？ いずれにしても、二人は復活されたイエスさまと出会ったことに喜び、夜になっていましたが、エルサレムまで慌てて引き返し、そして他の弟子たちに報告しました。

復活されたイエスさまは弟子たちの前で、姿を現し、イエスさまが、死から甦られたことを示されました。イエスさまを救い主として信じる私たちも、イエスさまと同じように、復活し、そして天国に導かれることが約束されています。

（お祈りします） 神さま、イエスさまが死から復活されたように、私たちにも復活の体を与え、天国での祝福の生命をお与えください。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。アーメン

イエスさまは、十字架の上で死を遂げられましたが、死から三日目の朝に復活し、そして弟子たちの前に現れました。そしてその後、イエスさまは天に昇っていかれ、今も天におられます。

イエスさまの生涯を、ずっと学んできましたが、イエスさまがどういうお方であったのか、改めて学びたいと思います。

イエスさまは、マリアの子としてお生まれになりましたが、聖霊によってお生まれになるという特別な状態でお生まれになりました。それがクリスマスでした。それはイエスさまは、真の神さまでしたが、真の人間の子どもとしてお生まれになったということです。それもお生まれになったのは、神さま・王さまのようなお城ではなく、家畜小屋でお生まれになりました。家畜の世話をするための飼い葉桶に寝かされたのです。

誰よりも、身分の低い状態でのおうまれでした。

そればかりか、お父さんとお母さんであるヨセフとマリアも貧しく、大工の子として育ちました。

それだけではありません。今まで学んできたように、イエスさまは犯罪者として逮捕され、そして極悪人と一緒に十字架刑に処せられ、苦しみながら、息を引き取られました。

これらのことは、イエスさまがお生まれになる前から決まっていたことで、イエスさまは嫌であるならば、それを行わないこともできたはずです。

しかしイエスさまは、父なる神さまが決められたことを、すべてそのまま受け入れて、貧しさと苦しみを背負われました。

イエスさまはなぜ、貧しさや苦しみを受け入れることができたのでしょうか？ 特に十字架に架かれるときなどは、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」（ルカ22:42）と父なる神さまに祈っておられました。

十字架で苦しむことは、イエスさまであっても、嫌だったのです。しかし十字架に架かれたのは、私を、そしてここにいる一人ひとり、みんなを、イエスさまが愛してくださっているからです。死ではなく、天国に行くことを望んでおられるからです。イエスさまが十字架で苦しみ、死を遂げられることにより、イエスさまを救い主として信じる私たちの罪が赦され、天国に行くことができるからです。

それほどまでに、イエスさまは、私たちを愛してくださっています。

だからこそ、みんなも、今、天国におられるイエスさまを信じていただきたいです。大好きになっていただきたいです。

お祈りします。

神さま、イエスさまが私たちを愛してくださるからこそ、貧しい生活も、苦しい十字架も行ってくださり、ありがとうございます。私たちも、イエスさまのことが大好きになり、イエスさまを神さまとして信じるができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

私たちは今日、神さまを礼拝するために教会に集まっています。この中には生まれた時から教会に来ているお友だちもいますし、自分で教会に来始めた人もいます。家族が来ているから、一緒に来ている人もいれば、自分で求めて教会に来ている人もいます。楽しいから来ている人がいれば、嫌だなと思いながらも仕方がなく来ているお友だちもいるかと思ひます。

先生も、お母さんがクリスチャンでしたので、中学生の時から教会に来ています。ちょうど、夏のキャンプに誘われたことがきっかけで、それ以後、ずっと教会に来ています。

教会に来始めるきっかけは、一人ひとり違うかと思ひます。しかし、覚えていていただきたいことは、一人ひとりが教会に来ることを、神さまが求めておられることを。そして、神さまは、今、みんなが教会に来ることを喜んでくださっています。そして、みんなが、神さまのことが好きになること、神さまを救い主として信じることを、神さまは願っておられます。

時に教会に来たくないときもあるかと思ひます。日曜日なのだから、もっと寝たいと思うときもあるかと思ひます。そのようなことは、神さまはすべて知っておられます。そして、そうした思いがあっても、教会に来ること、神さまを信じること、今も一緒にいてくださるイエスさまにお祈りすることを、神さまは喜んでくださいます。

**1:9 神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、
わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。**

自分で教会に来ている人は素晴らしいのですが、お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さんが教会に来ている人が、一緒に教会に来て、神さまを信じることも素晴らしいことです。日本では、「自分が四代目」、「五代目」というクリスチャンは、非常に少ないです。しかしアメリカやヨーロッパ等に行くと、「十代目のクリスチャンだ」という人もいますのですね。

お父さん・お母さんの信仰が子どもに、そして孫にと受け継がれていくのです。このことは、本当に素晴らしいことで、神さまから与えられた恵みです。

だからこそ、今日は特に、クリスチャンホームに生まれたお友だちに、素晴らしいことなんですよ、ということを理解していただきたいと思ひます。そして、今も一緒にいてくださる神さま、御子であるイエスさまを信じていただきたいと思ひます。

お祈りします。

神さま、今日も、神さまが私たちを教会へと招いて下さり、ありがとうございます。教会に来ることができ、感謝します。教会に来ているお友だちみんなが神さまを信じ、一緒におられるイエスさまの恵みに満たしてください。

特にクリスチャンホームのお友だちが、神さまがお与えくださった特別な恵みを受け入れ、感謝と喜びに満たされるようにお導きください。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

夏休みになっても、みんなが教会に来て、一緒に神さまを礼拝することができ、感謝します。イエスさまは、いつも私たちと一緒にいてくださいます。そして私たちがお祈りすると、イエスさまをとおして、神さまは聞いて下さり、そしてその祈りの答えをお与えくださいます。

しかし私たちは弱くて、本当に神さまがいるのだろうか、神さまが救ってくださるのだろうかと疑ってしまうこともあるかと思います。正直なところ、まだ、神さまがいるのか分からない人もいますかと思っています。

しかし今日の聖書には、次のように語られています。

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

イエスさまは、十字架に架かり、死を遂げられましたが、死から三日目の朝に甦ってくださいました。イエスさまを信じる人は、このイエスさまの十字架によって、あなたの罪が赦され、そして神の子となったことを言うてくださいます。そして、私たちが神の子となったとき、私たちは天国に行くことが決定しています。

そして十字架の死から復活されたイエスさまも、疑っていたトマスに語られました。「見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ20:29)。

そしてヘブライ書11章には、旧約の時代に生きた人たちのことが語られています。アダムの子アベルに始まり、ノア、アブラハム、イサク、ヨセフ、モーセ……ダビデさんも含めて良いかと思います。しかし、ここで挙げられている人たちは、みんな神さまを信じ、神さまによって与えられる救い、つまり天国における祝福を信じて、死んでいきました。こうした人たちは、信仰を持つことにより、神さまからの祝福を得て、みんな天国に行きました。私たちは、旧約聖書を読むことによって、また新約聖書におけるイエスさまや弟子たち(ペトロやパウロ)などのことを読むことによって、私たちも神さまによる救いを確認することができます。

みんなはまだ小さいです。これから長く生きることができるかと思っています。しかし、地上で、ずっと生き続ける人たちはいません。年齢を重ねると、みんな死んでいきます。ときには若くて死んでいく人たちもいます。事故や地震、戦争などで、子どもの内に死んでいく人たちもいます。

だからこそ、今から聖書を読んで、信仰をもって喜んで生きた人たちのことを知り、そして、神さまがここにいるみんなも救ってくださり、天国での祝福をお示し下さっていることを覚えて、また信じていただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、聖書に出てくる人たちは、神さまを信じ、イエスさまの十字架による罪の赦しと救いを信じました。私たちも、イエスさまの十字架によって救われ、天国での祝福が約束されていることを、信じるができるように、お導き下さい。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

イエスさまは、十字架の死から甦られたとき、イエスさまの復活を信じることができなかった弟子の一人トマスに対して、「見ないのに信じる人は、幸いである」(ヨハネ20:29)と語られました。

私たちもイエスさまを、直接見ることはできません。イエスさまから、直接お話を聞くことはできません。しかし、聖書をとおして語られるイエスさまを信じ、イエスさまが十字架の死から復活したこと、そして今は天におられ、今も生きておられることを、私たちが信じる時、神さまは喜んでくださいます。

そして、生きておられるイエスさまを信じて、お委ねして祈りを献げるとき、神さまは、私たちの祈りを聞き届けてくださいます。

このとき、自分は神さまを信じているのだから、あとは何を行っても良いのだと語る人もいます。しかし、私たちが神さまを信じるとはどういうことかということを、私たちはもう一度考えなければなりません。つまり、私たちがイエスさまを神さまと信じ、イエスさまの十字架によって罪が赦され、神の子となったと語るとき、私たちは神さまの御前に罪を犯したことを、改めて顧みなければなりません。

十戒で禁じられていることを行うこと、言葉で発すること、心の中で思うことも、神さまの御前では罪です。だから、私たちは死ぬこととなるのです。この私たちの罪のために、イエスさまが十字架に架かってくださったのです。十字架で苦しみ、死を遂げてくださったのです。死に打ち勝って、甦ってくださったのです。

そうであるならば、天国に入ることができることを喜びつつ、罪を救ってくださった神さまが喜んでくださることを行うのではないのでしょうか。教会に来れば良い、礼拝に出席すれば良いものではありません。聖書の御言葉に聴き、説教に聞くことにより、神さま、そしてイエスさまが喜んでくださるように生きるようになるのではないのでしょうか。

だから、今日の御言葉はこのように語ります。

御言葉を行う人になりなさい。

自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません(ヤコブ1:22)。

私たちのために十字架に架かってくださったイエスさまは、今も天におられ、みんなのことが大好きです。だからこそ、私たちもイエスさまのことが大好きになり、イエスさまが聖書をとおしてお語りになることを喜んで行うことができるようになっていただければと願っています。

お祈りします。

イエスさま、イエスさまが私たちの罪を赦すために十字架に架かってくださり、ありがとうございます。だからこそ、私たちもイエスさまを愛して、イエスさまが聖書をとおして語られていることを行うことができるようにしてください。

このお祈りイエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

学校や家において、「先生の言うことを聞きなさい。お父さん・お母さんのいうことを聞きなさい。守りなさい。」と言われたことがあるかと思います。確かに、みんなより長く生きてきた人たちから、教えていただくこと、学ぶことはたくさんあります。

教会でも、私は牧師ですが、先生と呼ばれています。そして牧師の語ることを聞きなさいと言われていたのではないのでしょうか。

しかし、注意をしなければなりません。学校の先生にしても、お父さん、お母さん、教会の人たち、年上の人たちは、みんなより長生きをして、みんなより多くのことを知っているかも知れません。

しかし、神さまではなく、人間です。人間は、先生も含めて、誰でもが、何もかも知っているわけではありません。誤ったことを教えるかもしれません。時には感情的になってしまうかも知れません。そうすれば、間違っていることを、平気で「正しい」こととして押しつけてくることもあります。だからこそ、注意しなければなりません。これは本当に正しいことなのか？ 誤ったことではないか、と考えるしなければなりません。

どうしたら間違いが分かるのでしょうか？ イエスさまが十字架の死と死から復活され、天国に上られた後、ペトロとヨハネは神さまのことを証していました。このとき、イエスさまと同じようにユダヤ人たちに捕らえられ、裁判を受けることとなりました。そしてユダヤ人たちは、ペトロとヨハネに対して、「決してイエスの名によって話したり、教えたりしないように」と命令しました(使徒4:18)。

しかしこのとき、二人はこのように応えました。「**神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。**」

神さまが、いちばん正しいことを語られます。それが聖書に記されています。ペトロとヨハネは、このことを証していました。神さまの言葉である聖書にこそ、正しいことが語られています。

このことは本当かな？ 誤りではないか、嘘ではないかと思ったとき、聖書がどのように語っているかを確認することができると、誤ったことを信じることもなくなります。そしてどうすれば良いか、迷ってしまうこともなくなってきます。

だからこそ、毎週、毎日、少しずつでも良いから、聖書を読んで、神さまが私たちに何を語りかけてくださっているかを確認していただきたいと思います。そうすれば、何が正しいかを、判断することができるようになってきます。

お祈りします。

神さま、私たちはどうしても何が正しいことか、判断することができないことがあります。しかし、神さまの言葉である聖書には、正しいこと、どのように判断すれば良いのか、語られています。だからこそ、毎週教会で、また家において、聖書を読み、正しいことを判断する力をお与えください。

このお祈り、イエスさまのお名前によりお祈りします。 アーメン

なんだか久しぶりにお話するように思います。講壇交換があり、先週はお休みをいただきました。その間も、川栄先生や岩崎先生が来てくださり説教を行ってくださると同時に、長老をはじめ、教会の方々の奉仕により、大宮教会が守られていますことに感謝しています。

さて、イエスさまが十字架の死から復活し、その後、天に昇って行かれましたが、12人の使徒・お弟子さんたちを中心に教会を運営していましたが、忙しくなりました。そのため、12人の他に、執事さんを立てることとなりました。7人選ばれるのですが、その一人がステファノさんでした。

ステファノさんは、教会の人たちに慕われていたと共に、聖書のことを良く知っていました。ユダヤ人の大祭司の前でも、旧約聖書のことを証します。そのため、ユダヤ人たちは、ステファノさんが恐くなります。そのため、イエスさまを十字架に架けたように、殺します。

このとき、ステファノさんは、逃げたりはしません。神の栄光と、神の右に立っておられるイエスさまを見届けて、56「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と語ります。すると、人々は、ステファノさんに襲いかかり、石を投げてきます。

このときステファノさんはさらに、59「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と語り、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫び、死んでいきました。

だれでも死ぬことは恐ろしいです。私たち人間は、神さまによって、生命が与えられています。毎日の食べ物・着るもの・住む家・快適な生活が与えられています。イエスさまが私たちの救いのために十字架に架かってくださいました。

そしてステファノさんが見たように、今も、イエスさまが聖霊をとおして私たちと共にいてくださり、見守ってくださいます。だからこそ、迫害されるのが怖いからと言って、神さまのことを否定するのではなく、神さまを信じていただきたいと思います。そこに本当の喜びが待っています。

今日の聖句を最後に確認します。ローマ14:8：わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。

お祈りします。

神さま、ステファノさんは、主なる神さまを信じ、イエスさまの十字架が自分の救いのためであったことを信じていました。そのため、教会で執事の働きに就きました。それだけではなく、ユダヤ人から迫害されても、神さまを信じて、証しすることができました。

迫害されることは恐ろしいです。それでもどのような時にも、本当の生命、私たち一人ひとりが、天国をお与えくださる神さまを信じて、証しすることができるように導いてください。このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

イエスさまの12人の弟子たちは忙しくなり、さらに7人を選びました。その中の一人、フィリポさんは、天使から、「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」(26)と呼ばれました。ガザとは、今、戦争が行われているところですから、聞いたことがある人もいるかと思います。そのガザです。

ここにはエチオピアというアフリカの国の女王カンダケの高官であった宦官である人が、エルサレムに神さまを礼拝して、帰る途中でした。

天使は、フィリポさんに、この宦官のところに行くように命じました。このとき宦官は、旧約聖書のイザヤ書を読んでいましたが、理解することができず困っていました。このときにフィリポさんが来たので、解説して欲しいと頼みました。

それはイザヤ書53章に記されていることですが、イエスさまが十字架に架けられることが預言されているところでした。

8:35 「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた」。

宦官は、イエスさまが救い主であることが分かり、喜びました。そして水があるところを通りがかったので、宦官は、洗礼を授かりたいと願います。洗礼を授かって、神さまによって救われたいことを願ったのです。

フィリポさんは、反対する理由がありませんので、この場で、宦官はフィリポさんから洗礼を授かりました。

このとき、宦官の前から、フィリポさんもいなくなりましたが、宦官は、喜びに溢れ、旅を続け、エチオピアに帰って行きました。

フィリポさんは、このエチオピアの宦官一人に福音を語り、洗礼を授けるために、天使によって、ガザに遣わされました。伝道すること、説教をすることは、そこに何人集まっているかということとは関係ありません。たとえ一人であつても、神さまを信じようとする人、神さまのことを知りたい人がいるならば、牧師は伝えに行きます。みんなも、神さまを信じたとき、一人でも、神さまのことを知りたい人がいるならば、その人に、神さまのことを伝えて頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、フィリポさんは、たった一人エチオピアの宦官に、神さまのことを伝えるために、遠くガザにまで遣わされました。私たちも、神さまを知りたい人がいるならば、その人のために神さまのことを話すことができるようにさせてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

イエスさまが十字架の死と死からの復活を遂げ、その後、天に昇って行かれましたが、ペトロやヨハネなどの12人の使徒たちを中心に、教会が成長していきます。

先週は、フィリポが、エチオピアの宦官一人のために、ガザにまで行き、福音を語ったことを学びました。神さまにとって大切なことは、神さまが救いのために約束された人、みんなに聖書の言葉が宣べ伝えられ、神さまを信じることができるようになることです。

さて、サウロという、ユダヤ人がいました。サウロは、旧約聖書の律法を厳格に守っていましたので、イエスさまを信じるクリスチャンのことを憎んでいました。そのため、このときもクリスチャンを殺すために、ダマスコの教会に向かっていました。

このときサウロは、突然、目が見えなくなります。そして地に倒れます。

そしてサウロは声を聞きます。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と。

このときサウロは尋ねます。「主よ、あなたはどなたですか」と。

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。

そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」と語られました。

このときサウロが行こうとしていたダマスコには、神さまを信じるアナニアがいました。そして神さまはアナニアに、サウロの所に行くことを命じます。

そして次のように語られました。

15 「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。

16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」

このときアナニアはサウロの所に行き、サウロの上に手を置き、神さまの働きのために洗礼を授けました。このときサウロは、たちまち目からうろこが落ちるように、目が見えるようになったのです。

その後、サウロは、パウロと呼ばれるようになり、今のトルコやギリシャで伝道を行い、世界に福音が伝わるための大きな働きをしました。ローマ・コリント・エフェソ・フィリピと「～信徒への手紙」と呼ばれる多くの書簡を聖書に残しました。

神さまは、今、神さまを憎んでいる人であっても、神さまを信じる人に、さらに神さまのことを宣べ伝える伝道所を選んでくださいます。今、教会に来ているみんなも、神さまが教会にお集めくださっています。神さまを信じて、聖書の御言葉に聞き続けて頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、クリスチャンを迫害・殺害していたパウロであっても、神さまは神さまを信じ、神さまのことを宣べ伝える伝道者にして下さいました。どうか、また教会に来ていない人たち、神さまを信じていない人たちも、神さまの聖霊の働きによって、神さまを知り、神さまを信じることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

タイトルを「異邦人の回心」としました。「異邦人」とは外国人のことです。つまり、旧約聖書の時代、言い換えますとイエスさまが来られるまでは、イスラエルの人たちが、神さまによって選ばれた人たちであると言われていました。このときから外国人でも、神さまを信じた人たちは救われていたのですが、イスラエルの人たちが中心でした。

しかしイエスさまは、十字架の死と死からの復活を遂げて、天に昇られるときに、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい」(マタイ28:19)と語られました。

そして、イエスさまは天に昇っていましたが、ペトロさんを初めとするイエスさまの弟子たちにとって、異邦人(外国人)に福音を語れと言われても、困ってしまいました。

こうしたときに、ペトロの所に、神さまが声をかけられます。そして、目の前に、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥がありました。そして神さまは「ペトロよ、身を起こして、屠って食べなさい」と語られます。旧約の時代には、「汚れているので食べてはならない」と言われていたものばかりです。そのためペトロは「とんでもないことです」と応えますが、神さまは「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」と語れます。ペトロさんは訳が分からず、同じことを3度も語ります。

つまり、旧約の時代とは今は違うのですよ。食べてはならない物も食べても良いように、異邦人(外国人)にも神さまのことを伝えて良いのですよと、神さまはペトロさんに語られていたのです。

そして、このとき、イタリア隊というローマの兵士コルネリウスがペトロさんの所に来ます。彼は、神さまを信じて、神さまに祈っていました。神さまは、このコルネリウスが洗礼を受け、正式にクリスチャンとして受け入れられるようにと、ペトロさんの所に導かれたのです。

ペトロは外国人であるコルネリウスがペトロの所に来たことにより、神さまが語っておられることが分かりました。そしてコルネリウスさんに、洗礼を授けて、正式にクリスチャンの仲間に入れました。

聖書は語ります。使10:43 「また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」そしてこの後、パウロさんをとおして、世界に福音が伝えられていきます。

私たちは日本人であり、イスラエル人ではありませんが、神さまを信じて、救われました。神さまが、日本まで、神さまのことを伝える人をお与えくださっていることに感謝したいと思います。

お祈りします

神さま、ペトロさんにより、異邦人伝道が始まり、パウロさんによって広められ、遠く日本に生きる私たちも神さまを信じることができ、ありがとうございます。神さまの恵みに心より感謝します。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

神さまがペトロさんに、異邦人にも福音を伝えるように語られ、百人隊長コルネリウスの家で福音を語り、神さまを信じたため、洗礼を受けました。そのことは、エルサレム教会の人たちにも伝えられました。

一方、エルサレムでは、神さまを信じていることにより、ユダヤ人たちから迫害を受けるようになりました。そのため、イエスさまを信じる人たちは、エルサレムから逃げ、アンティオキアに向かいました。

そのときも、弟子たちは、ユダヤ人だけに福音を語っていたのですが、キプロス島やキレネから来た人たちがおり、その人たちに神さまのことを伝えようと、神さまを信じるようになりました。それが多くの人たちだったのですね。

そのため、もっと神さまのことを伝える人が必要となり、エルサレム教会から、バルナバと呼ばれるひとが遣わされます。そしてバルナバさんも多くの人たちに福音を伝えました。

またさらにバルナバは、この後パウロと呼ばれるようになるサウロを探しだし、アンティオキアに一緒に行きます。こうしてアンティオキアにおいて教会ができるのですが、このアンティオキア教会の信者のことが「クリスチャン」と呼ばれるようになります。今、私たちがクリスチャンと呼ぶのは、このときからです。

このようにアンティオキアにおいて神さまを信じるクリスチャンが増えていくと、エルサレムで迫害されていた人たちも、さらにアンティオキアに集まり、アンティオキアが教会の中心地、拠点となっていきました。

この後、パウロとバルナバが、宣教旅行に出かけていくことにより、さらに福音が世界へと広まっていくこととなります。

マルコ福音書 16 章

15 「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」。

神さまの願いは、イエスさまを信じるクリスチャンが、世界中に広がり、多くの人たちが神さまを信じることです。パウロとバルナバによって広められた福音は、今、私たち日本にまで広がっています。日本でも、神さまを信じる人は、多くありませんが、まだ神さまを信じていない人たちが、神さまを信じるようになることを神さまは願っておられます。みんなも神さまを信じて、そのことを、家族やお友だちに伝えて頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、教会の中心がエルサレムからアンティオキアに移りました。そして、ユダヤ人から異邦人、世界の人たちが、神さまを信じるクリスチャンとなるように、神さまは求めておられます。私たちも、神さまを信じて、クリスチャンとなることができるようにしてください。そしてそのことを周りの人たちに伝えることができるようにしてください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

子どもメッセージ289 「パウロとバルナバ」 使徒言行録13:1～52 2024年10月20日

バルナバは、パウロを見つけて、アンティオキア教会に来ました。その他にも、何人かの兄弟たちも一緒でした。ここでは、エルサレムのように、厳しい迫害はありません。

バルナバさん・パウロさんたちが、神さまを礼拝しているとき、神さまが聖霊を通して語られます。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために」(使徒13:2)。

神さまは、バルナバとパウロを、異邦人の宣教のために送り出されたのです。バルナバとパウロは、まずキプロスに、そしてピンディア州のアンティオキアに遣わされます。

神さまのことを人に伝えるとき、神さまを信じる人たちも出てきます。そうすれば、本当の喜びに満たされます。しかし誰もが神さまを信じることはありません。

みんなも、「神さまを信じているよ。みんなも教会に来て、神さまを信じない？」とはなかなか言えないと思います。馬鹿にされるかと思ってしまいます。仲間はずれになってしまうかと思うこともあります。

だからこそ、神さまを信じるばかりか、神さまのことを、まだ神さまのことを知らない人たちに伝えなさい、という働きは、非常に勇気のいる仕事です。しかし、聖書のことを語るとき、必ず神さまを信じる人たちが与えられます。そして喜びに満たされます。だからこそ、パウロは次のように語っています。

コリントの信徒への手紙二 1章6節の御言葉を示しました。

6 わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。

また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、
あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。

パウロ自身は、そのとき、苦しいのです。しかし、それは、一人の人、あなたが救われることにより、あなたの慰め、喜びが、自分にも与えられる、と語っています。神さまを信じる人が加えられることは、神さまにとって、そして教会にとって、教会に集う私たち一人ひとりにとって慰めであり、喜びとなります。

パウロもバルナバも、この喜びを知っているからこそ、苦しいことの連続ですが、神さまのことを伝えるために、宣教に出かけることができたのです。ここにいるみんなも、神さまのことを信じて、家族やお友だちに神さまのことを伝えることができるようになっていただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、バルナバとパウロは、神さまのことを伝えるために、宣教に遣わされました。苦しいことの連続です。しかし、神さまのことを信じる人が与えられる喜びをもって、宣教を続けることができました。

私たちも、神さまを信じて、神さまのことを伝えることができるようにしてください。このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

イエスさまが復活して、天に昇られた後は、ペトロやヨハネ、そしてパウロたちが中心となって、伝道が行われ、教会が大きくなっていきます。ただ、人が多くなるにつれて、意見の違いも出てきます。イエスさまがおられれば、イエスさまが解決をしてくださいました。しかし、今はイエスさまはいません。そのため、その答えを、教会にいる人たちで解決しなければなりません。

そのために、教会は、会議を行い、話し合いをしました。ここでの問題は、今までは、イスラエルの人たちは、みんな割礼を受けていました。そのことが、神の民であるイスラエルに属していることの証でした。しかしイエスさまは、「神さまを信じる人は洗礼を受けなさい」と語られています。では、ユダヤ人ではない異邦人は、洗礼を受ければそれで良いのですか、それとも割礼も受けなければならないのですか？ という問いかけでした。

教会で会議が行われるとき、神さまが聖霊をとおして働いてくださり、正しい判断ができるよう祈りつつ行われました。そして教会は、イエスさまが水で洗礼を授けることにより、クリスチャンとして認めているのだから、もう割礼はいらない、割礼はイエスさまが来られるまでのことである、との結論を出しました。

会議で決まったことは、すべての教会が、共有できるように、伝えられていきます。今では、メールで一斉に通知を受け取ることができますが、当時は、人が遣わされて、伝えることが必要でした。

15:23 使徒たちは、次の手紙を彼らに託した。「使徒と長老たちが兄弟として、アンティオキアとシリア州とキリキア州に住む、異邦人の兄弟たちに挨拶いたします」。

大宮教会も、「日本キリスト改革派教会」という教会に属しています。10月22～24日に、大会という会議が行われました。そこで決まったこと、ウェストミンスター信仰告白と大教理問答の教会公認訳が決まりましたよ、とか、創立80周年宣言が作られていますよ、80周年記念信徒大会が2026年に行われますよ、ということが決まり、そして大宮教会の人たちにも報告が行われました。

会議は、教会の人たちが、同じ信仰に立って、教会を建てていく上で大切なことです。私たちも、使徒たちと同じように、教会での会議を大切にしている教会であることを、お覚え頂ければと思います。

お祈りします。

神さま、私たちは神さまを信じています。しかし、時に時に意見が違うこともあります。そのために神さまは、会議を行うことにより、解決の方法を定めて下さり、ありがとうございます。だからこそ自分の力で解決をしようとするのではなく、教会で会議をして話し合い、そして聖霊の働きによって決定していくことを大切にすることができるようになってください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

パウロとシラスは、神さまから宣教するように命じられて、アンティオキア教会から派遣されて、伝道に行っています。神さまのことを伝えることにより、神さまを信じる人も出てきますが、反対する人たちも出てきます。フィリピという町で、パウロたちが神さまのことを語っていたとき、逮捕され、牢屋に入ることとなりました。逮捕されたときに、服が剥ぎ取られたり、鞭で打たれたりしました。また、足には足枷、つまり鎖が巻かれ、自由に歩くことすらできません。

それでも、牢屋の中でパウロとシラスは、神さまを讃美して、神さまにお祈りをしていました。パウロもシラスも、神さまが一緒だから、神さまが守ってくださることを信じていたからです。神さまが、自分たちを世界の宣教のために遣わしてくださったのであり、そのために守られるとの信仰がありました。

このとき、突然、大きな地震が発生しました。牢屋自体が壊れ、囚人たちも自由に逃げ出すことができる状態になりました。このときパウロたちは、他の囚人たちに呼びかけて、逃げ出すことをしないように話し合いました。逃げ出したら、捕まったときに殺されるからです。逃げることもできるにも関わらず、ここに残ることにより、喜んでもらい、早く牢から出ることができるようになるからです。

しかし、牢屋の見張りをしていた看守は、そのことを知りません。囚人が皆、逃げ出したと思ひ込み、責任をとって自殺しようとしてしました。このときに、パウロが「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」と叫びました。

このときに看守は、パウロの信じている神さまを信じるようになり、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」と尋ねます。このときパウロとシラスは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」と答えます。そしてパウロは、看守とその家族に、神さまのことを語りました。

看守はもう迷いはありません。イエスさまを救い主として信じて、パウロから洗礼を授かりました。

どれだけ苦しいときでも、何が正しく、神さまが何を求めているかを考えて行動するとき、神さまは守ってくださいます。こうしてパウロとシラスは助け出されたのですが、同時に、このように正しい行動を行うことにより、それを見ていた人たちは、私たちの行動を見て、神さまを知り、神さまを信じるようになります。

みんなも、このときの看守のように神さまを信じて、信仰を告白していただきたいと思います。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」。

お祈りをします。

神さま、パウロとシラスは逮捕され、苦しいときでした、それでも正しいこと、神さまに喜んでいただくことを考え、行動しました。私たちも、神さまを信じて、正しい行動、神さまに喜ばれる行動をすることができるようになしてください。

同時に、私たちの行動を見て、神さまを信じる人が出てくるように、お導きください。

このお祈り、イエスさまのお名前によりお祈りします。アーメン

パウロは、各地を回りながら、神さまのことを語り、伝道を行っており、ギリシャのアテネにまできました。現在でもギリシャの首都はアテネですが、当時、ギリシャは、ローマと共に世界的に栄えていた街でした。そしてアテネの中に、アレオパゴスという長老たちが話し合う場所がありました。

日本でも「八百万の神」と言いますが、ギリシャも日本と同じように、いろんな神があり、偶像が造られていました。中には、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえありました。知られていないけれども、その神に祈るということが行われていました。

このときパウロは、アテネの人たちに語りました。使徒言行録17:24～26 **世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。**

日本でも、神社に祀られている像を「これが神だ」と信じている人に、「私たちを救ってくださる主なる神がいるから信じなさい」と語っても、ほとんどの人は、主なる神さまを信じることはしません。アテネも同じような状況でした。

アテネの人たちは、パウロが語ったことを、あざ笑う人もいたり、何もなかったかのように、その場から離れていきました。しかし、パウロの言葉を信じて、主なる神さまを信じるようになった人もいたのですね。

私たちも、主なる神さまを信じるように、家族の人や友だちなどに話しても、ほとんどの人は、聞いてくれません。信じてくれません。しかし、中には、信じてくれる人、教会に来たいと思う人たちが、絶対にいます。

信仰は、頭で考えて理解できれば信じることができるかと言えば、違います。神さまが、聖霊を通して働きかけてくださるとき、その人は、神さまを信じるようになります。

コリントの信徒への手紙一 2章

4 わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、

“霊”と力の証明によるものでした。5 それは、あなたがたが

人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。

だからこそ、諦めることなく、機会があるときに、神さまのことをお話していただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、日本では、アテネと同じように、神さまを信じている人が少なく、偶像を信じている人たちが一杯です。しかしパウロがアテネで語ったとき、神さまを信じる人たちもしました。私たちも、諦めることなく、神さまのことを話し続けることができるようにしてください。このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

パウロさんは、旅行をしながら、福音を伝えています。今日は、トロアスという所に行ったときのことをお話しします。

今でも、長い時間働くことが求められる人も多くいるかと思いますが、イエスさまの時代はもっとひどい状態でした。奴隷であれば、主人に命令されれば、朝早くから夜遅くまで働くことが求められます。

パウロの訪れたトロアスにも奴隷はいましたが、その奴隷の青年が、パウロの開いている礼拝に来ました。奴隷ですから、一日中働いて、疲れた状態で、礼拝に集ったのです。正直なところ、分からないお話であれば、居眠りをしてしまうこともあるかと思いますが、この青年は違いました。パウロの話しを楽しみに来ていました。

しかし、一日働きづめ、疲れがあります。眠ってしまうのですね。大宮教会のように、テーブルと椅子があれば、いざとなれば眠ってしまっても、危険はありません。しかし、このとき大勢の人が押し寄せ、部屋中が一杯でした。ですから、後から来た青年は、窓枠の所に座っていました。しかし、眠りこけてしまうと、どうなりますか？ 窓から外に落ちてしまったのです。ここは3Fです。そのため、この青年は、落ちたことにより、死んでしまいました。

このとき、パウロも降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ生きている。」パウロは、この青年を復活させてくださいました。神さまは、この青年が、一生懸命、神さまを礼拝することを喜んでくださり、新しい生命をお与えくださったのです。

日曜日に仕事を休むことができるのであれば、朝の礼拝に出席することができます。しかし、礼拝に出席することのできない人たちも、夕方の礼拝に来たり、あるいは夜になってから個人的に礼拝をもつこともできます。だからこそ、日曜日、お仕事や用事があるために、礼拝に出席できないときであっても、神さまを礼拝することの大切さをお覚えいただきたいと思います。

ヘブライ人への手紙10章25節

ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合いましょう。
かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、
ますます励まし合おうではありませんか。

お祈りします

神さま、日曜日に教会に来ることができないこともあります。それでも神さまは、みんなが神さまのことを覚えて、終わってから、一人ででも神さまの前に来て、神さまを礼拝することを喜んでくださいます。

私たちも、日曜日の礼拝を、大切にすることができるようになしてください。
イエスさまのお名前によりお祈りします。 アーメン

主イエスは、逮捕され、十字架に架かることを知っておられましたが、逃げることなく、エルサレムに上られました。それと同じように、宣教旅行をしているパウロに対して、エルサレムに上ると逮捕されることが、聖霊によって告げられていました。このときパウロと一緒にいた周りの人たちは、パウロにエルサレムに上らないように願います。

しかし、パウロは、このように答えます。

使徒21:13 「泣いたり、わたしの心をくじいたり、

いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、

エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」

主なる神さまを信じていることにより、イエスさまを信じて、十字架の死と復活を信じていることにより、またこのことを人に証しすることにより、逮捕されると語られたら、皆さんならどうするでしょうか？ そんな嫌だから、神さまを信じることを止めるでしょうか？ そのような人もいるかもしれません。

しかしパウロさんは、主なる神さまを信じることを止めることはしませんでした。そればかりか、逮捕されることも恐れません。

なぜ、パウロはこれほどまでに強くなることができたのでしょうか？

イエスさまこそが、唯一の真の神さまであることを知っているからです。イエスさまが十字架で死んでくださったことで、パウロさん自身の罪が赦されたことを知っているからです。それ以外に、救われることはありません。天国に行く道はありません。

逮捕されて、死刑にされたとしても、イエスさまが復活して天に昇って行かれたように、復活の生命があることを信じているからです。

だからこそ、パウロはフィリピに書き送った手紙において、このように語っています。

わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことも利益なのです(フィリピ1:21)。

パウロはこのことを別のときに逮捕されているときに語っています。生きている間は、キリストを空かしすることができますが、死んだときは「利益」つまり天国の祝福に入れられ、もう苦しいことも悲しいこともありません。

パウロにとっても、逮捕されると、苦しかったでしょう。殺されることが恐かったでしょう。しかしそれ以上の救いの喜び、神さまと共にいることの祝福を知っていました。

だからこそ、みんなも、イエスさまの十字架を見上げて、みんなが生きるため、喜びに満たされるために、イエスさまが十字架に架かってくださったのだ、ということを知っていただきたいと思います。そうすることにより、逮捕されるようなことがあったとしても、なおも、神さまを証しすることができるようになります。

神さま、パウロさんは、イエスさまの十字架によって罪が赦され、天国の希望が与えられていたからこそ、逮捕されることを知っていましたが、エルサレムに行くことができました。私たちも、苦しいこともあるかと思いますが、イエスさまを救い主として信じ、いつまでもイエスさまを証しすることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

パウロは、逮捕されることが分かっているにも関わらず、そして一緒にいた人たちが反対しているのにも関わらず、エルサレムに行きました。そして、ユダヤ人たちに逮捕されました。

ユダヤ人たちは、パウロがイエス・キリストを救い主であると語ることを許すことができませんでした。

パウロも何も不安がなかったわけではありません。パウロも逮捕されることに恐れはあったはずです。しかしパウロは、勇気をもって、逮捕されるためにエルサレムに行きました。

それはなぜでしょうか？

主なる神さまが、いつも一緒にいることを知っていたからです。神さまが必要な道を開いてくださることを知っていました。そして逮捕され、牢屋に入れられているときのことでしょう。夜になり、主なる神さまがパウロに現れてくださいました。そして語られます。

11 「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、

ローマでも証しをしなければならない。」

パウロは神さまのことを語るために、宣教旅行をしました。それは小アジアと呼ばれる現在のトルコやギリシャ地方でした。しかし、神さまは世界中に福音を伝えるように求めておられます。そしてパウロも、当時世界で一番栄えていたローマにまで、さらにはもっと西のイスパニア、現在のスペインにまで、神さまのことを語り、福音を伝えたいの思っていました。

そのため、パウロの所に神さまが現れ、語ってくださったことは、勇気ができることだったと思います。神さまがその道を開いてくださると、約束してくださったからです。

パウロさんのときのように、今私たちが困っているときに、神さまが直接表れてくださることはありません。しかし、神さまは、聖霊をとおして今も私たちと一緒にいてくださいます。そして私たちが歩む道を開いてくださいます。だからこそ、みんなも、苦しい時、どうしたら良いのか迷った時には、今も一緒にいてくださるイエスさまにお祈りして欲しいと思います。

お祈りすることにより、思っていたことが達成できるのか、それは今はダメだよと別の道を与えてくださるか、答えをお示し下さいます。

だからこそ、パウロが神さまを信じて、逮捕されてもローマにまで福音を伝える勇気を与えられたように、みんなも、いつでも神さまを信じて、祈り求めて頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、パウロが神さまを信じて、逮捕を恐れることなく、神さまのことを伝えるためにローマにまで行ったように、私たちも、苦しいとき・困ったときにも、神さまを信じて、神さまに祈って、神さまが私たちの歩む道を示して下さいますことを信じることができるようにしてください。 このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。アーメン

パウロはユダヤ人たちに逮捕されましたが、自分がローマの市民権を持っていることを伝えることにより、ローマ皇帝に訴えることとなりました。このとき、まず、ユダヤを統治していたアグリッパ王の前で裁判にかけられます。

偉い人や有名な人の前に行くと、緊張したりすることはないでしょうか？ 思っていることがあっても、何も話せないということもあるかと思います。しかしパウロは違いました。ローマ皇帝に訴えているのだから、ユダヤの王の前にも平気でした。

そればかりか、パウロはアグリッパ王の前で、自分もユダヤ人であり、厳格なファリサイ派であったこと、さらにはクリスチャンを迫害していたことも語ります。

しかし、パウロは、復活されたイエスさまが「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と語られる声を聞き、イエスさまを救い主として信じたこと、そしてイエスさまを証しする働きに召されたことを告白しました。

そればかりか、アグリッパ王に対して、神さまを信じることの素晴らしさを語り、信仰の勧めを行いました。

パウロは、アグリッパ王であっても、ローマ皇帝であろうとも恐れることはありません。緊張したりすることはありません。むしろ、判決を受けることを恐れることなく、喜んで神さまのことを証しします。

なぜなのか？ パウロは、次のように語ります。

16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

パウロは、神さまを信じることを恥と思わず、人に隠すことなく、かえって、人に伝えていました。なぜならば、イエスさまが十字架で死を遂げられましたが、三日目に甦り、天に昇られたからです。そしてイエスさまを救い主と信じることにより、イエスさまが復活されたように、復活の体が与えられ、イエスさまと共に天国（神の国）に入ることが決定しているからです。

日本でも神さまを信じている人は少ないです。でも神さまはいつもみんなと一緒にいてくださいます。そして、見守り、救ってくださいます。

だからこそ、偉い人、地位の高い人の前でも、自分が神さまを信じるクリスチャンであることをはっきりと語ることができるようになっていただきたいと思います。

主なる神さま、パウロは、王の前でも、神さまを信じていることをはっきりと語ることができました。私たちも、教会に来ていること、神さまを信じていることを、友達やだれの前でも、はっきりと答えることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によってお祈りします。 アーメン

パウロは逮捕され、ローマ皇帝の前で弁明するために、ローマに移送されることとなりました。このときエルサレムからカイサリアに行き、そこから船に乗り、地中海を渡っていかなければなりません。パウロ自身、何回も船に乗っていましたから、危険も知っていました。クレタ島の「良い港」と呼ばれる所に着きました。まだローマまでは、先があります。

パウロは何回も船に乗っていますし、天候のことも分かっていましたので、パウロは船と一緒に乗っている人たちに言いました。10「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります」と。

しかし、百人隊長はパウロの言うことを聞かず、船長や船の責任者を信用して旅立ち、別の港まで行くことにしました。

しかし間もなく、エウラキロンと呼ばれる暴風が吹いてきて、パウロの船は遭難そうなんしました。三日間、暴風の中、船は流されるままでした。いつ死んでもおかしくない状況です。

しかしこのとき、神さまがパウロに声をかけられ、そしてパウロは皆に語ります。

22～26「しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずですよ」。

パウロたちは、暴風雨から14日目になり、ようやく陸地が近づいてきて、助かることとなりました。船には276人が乗っていて、また中にはパウロのように囚人として移送されている人もいました。兵士たちは、囚人が逃げないかと恐れ、殺そうとしましたが、百人隊長は、パウロも助けたかったので、兵士たちが囚人を殺さないように命令しました。

そうして、船に乗っていた全員が助かったのです。

私たちは、神さまから直接言葉を聴くことはないかも知れませんが、しかし、お祈りすることにより、人から助言されたり、解決する道が示されることがあります。だからこそ、苦しいとき、困ったとき、自分でなんとか解決しなければならないと、頑張るのではなく、まず最初に神さまに祈り、神さまに助けを求めることが大切です。そうすることにより、神さまは、私たちが行うことをお示しくくださいます。

お祈りします。

神さま、パウロは神さまを信じ、神さまにお祈りすることにより、神さまからの助けが与えられ、パウロと共に船に乗っていた全員が助かりました。だからこそ、私たちも、苦しいとき、困ったときに、自分で解決するのではなく、神さまにお祈りして、委ねることができるようにしてください。イエスさまのお名前によりお祈りします。アーメン。

パウロは、エルサレムにおいて捕らえられた後、ローマ市民として、ローマ皇帝に上訴したために、ローマに送られてくることとなりました。途中で、船が難破して死にそうになったこともあります。悪天候のため、何ヶ月もその土地に留まらなければならないこともあります。そして、人々の病気を癒やしたこともあります。

神さまは、パウロに対して、異邦人に伝道するように求め、そしてパウロ自身もローマで神さまのことを語りたいと願っていました。それが、達成されました。

パウロは、ローマでは、番人が一人いましたが、牢獄に入ることなく、自由に生活することができました。そのため、人々を集めては、神さまのことを伝えました。とくにユダヤ人たちと合いました。そしてパウロは、分派として、旧約聖書で語られてきたことを否定しているのではなく、すべてを守ってきたことを語りました。

パウロの言葉を聴いた人の中には、パウロの言葉を信じた人もでてきましたが、信じない人もいました。

ここで大切なことは、イエスさまによって約束されていたことが守られたこと、また神さまが、パウロがローマに行くまで守ることをお語りくださり、それが守られ実現したということです。

イエスさまは、十字架の死から復活を遂げ、その後、弟子たちに教えられた後、40日後に天に昇って行かれました。イエスさまは天に昇る直前に、弟子たちにこのように語っていました。

使徒1:8 そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、
また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。

パウロは3度にわたり、異邦人伝道をするために宣教旅行に出かけることができました。そして最後に、ローマにまで来て、神さまのことを語ることができました。このように、神さまは、約束を守って下さいます。

神さまは、私たち一人ひとりもご存じです。そして私たちも、パウロのように、神さまを信じて、神さまの語られることに聴き従うとき、どのような苦しみにあつたとしても、神さまは守ってくださり、予定を達成することが許されます。

だからこそ、神さまを信じ、いつでも神さまの御言葉である聖書に聞き、聖書に従った歩みを行って頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、パウロは神さまを信じて、異邦人に福音を伝え、ローマにまで行くことができ、願いを達成することができました。私たちも、神さまを信じて、どこまでも聖書に従った歩みを行うことができるように、してください。

イエスさまのお名前によりお祈りします。 アーメン

パウロは逮捕されて、そしてローマ皇帝の前に出頭するためにローマに送られたことをお話ししてきました。

今日の所は、少し時間が前になります。パウロは、ローマに行き、神さまのことを伝えたいと願っていた頃に、ローマの教会に手紙を書いていました。パウロは生粋のユダヤ人であり、ファリサイ人でした。そのパウロが、わざわざローマにまで、福音を語りたいと願うことは、世界の中心地であったローマに憧れていたのだらうと思うことができるかと思えます。

しかしパウロの思いは少し違います。世界の中心地だからこそ、ローマには、ローマの人たちばかりか、世界中の人たちが来ています。パウロは、復活の主イエスと出会い、異邦人伝道に召されましたが、ローマに来ることにより、世界中の人たちに神さまのことを語り、また伝わっていくだろうということを考えていたのです。

そのため、パウロはこのように語ります。

1:16 わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、
ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

パウロは世界中の人たちが、主なる神さまを知り、イエスさまによって救われて欲しいと願っていたのです。そしてパウロは「福音を恥としない」と語ります。神さまを信じるのが、人に隠すようなことではなく、神さまを信じることで、神さまから力が与えられるのだと語ります。その上で、次のように語ります。

1:17 福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

「義」とは「正しさ」のことですね。神さまを信じることによって、正しい道を歩むことができるようになります。そして間違っていることを正すことができるようになります。ですから神さまを信じ、神がお語りになる聖書の言葉を学び続けることによって、何が正しいか判断することができるようになりますし、またそのことから困っている人、貧しい人を助けたりする助け合う心、愛を理解することができるようになります。

だからこそ、みなさんも、教会に来ること、神さまを信じるのが恥ずかしいことと思うのではなく、むしろ誇りに思い、また家族やお友だちにも伝えて頂ければと思います。

お祈りします。

神さま、パウロはローマの人たちに、神さまを信じることは恥でもなんでもなく、むしろ正しい道を歩むことができる誇りに思うことであると語っています。私たちも、神さまを信じて、救いの喜びに満たされて、誇りをもって生きることができるようにしてください。このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

私たちは、他人の失敗や誤りに気がつく、笑ったり、指摘したくなります。しかし、自分の失敗に対しては、指摘されても受け入れることができず、ときに怒ったり、反論してしまいます。

日本語には「人の振り見て我が振り直せ」ということわざがありますが、私たちは、笑ったり、誤りを指摘する人よりも優れているのでしょうか？あなたが笑う人は、それだけ劣っているのでしょうか？

明らかに、「自分よりは劣っている」と感じる人もいるかもしれません。しかし、いざ、私たちが神さまの御前に立つとき、私たちは自分のことを誇ることができるのでしょうか？

神さまは、あなたのすべてを知っておられます。生まれる前からのことです。毎日、行っていること、口から発することば、心の中で思っていることすらも知っておられます。そして神さまの御前にあって、これらの一つでも神さまの義しさにかなわないことは、すべて罪です。そして神さまの御前にあって、罪は死ぬべきことです。

そうであるならば、私たちは、皆が、神さまの御前にあって罪人とされます。他人のことを笑っているけれども、「あなたは神さまの御前に義しいの？」と問われてしまいます。

つまり、私たちは、神さまの御前に生きる時、自分を誇ることなどできません。そうであるならば、同時に、過ちや失敗を笑ったり、指摘したけれども、あなたはどうか？と言われるのではないのでしょうか。

だからこそ私たちは、イエスさまの十字架によらなければ、私たちの罪が赦されることなく、天国に行くことができる資格などないのです。そして私たちが、イエスさまによって罪が赦され、天国に行くことができるようになったことを理解したとき、笑ってしまった人に対しても、失敗を笑うのではなく、自分も同じ失敗を行うのだと、その人を赦し、受け入れることができるようになるのではないのでしょうか。

だからこそ私たちは、人の失敗や過ちを怒ったり、笑ったりするのではなく、それを赦し、そして暖かく受け入れることが求められているのではないのでしょうか。パウロはこのように語ります。

ローマ13:8 互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。
人を愛する者は、律法を全うしているのです。

お祈りします。

主なる神さま、私たちは、人の失敗は笑ってしまうのに、自分の失敗が笑われたり、指摘されると怒ってしまいます。どうかこの弱い心をお赦し下さい。

そして、遜り、誰であっても受け入れ、愛することができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

パウロの話しを続けてきていますが、今日は少し違った角度から考えたいと思います。イエスさまも同じですが、パウロも、ユダヤ人たちを批判しています。本来、ユダヤ人とは、アブラハムの子孫であり、神さまによって選ばれた民でした。しかし、ユダヤ人たちは、イエスさまから批判されています。その理由は、神さまがアブラハムやモーセなど、旧約のユダヤ人であるイスラエルの人たちに、語りかけた御言葉、そして律法としての十戒を守っていなかったからでした。

ユダヤ人たちが一番間違っていたことは、律法を守れば救われると語っていたことです。もちろん、神さまは律法である十戒を守ることを求めています。しかし、十戒をいくらまもったとしても、神さまが求めていることを達成することなどできません。神さまは、完全に義しいお方であり、私たちの行いだけではなく、口から出てくることば、そして心の中もすべてご存じです。家族や友達も、誰も知らないことであっても、神さまはすべてを知っておられます。

そのため、神さまから「間違っているよ」、「それって罪だよ」と語られたとき、私たちは、それを認めて謝るしかありません。

自分の力で、救いを求めることができないからこそ、神さまを信じて、神さまにお願いするしかありません。

このときに大切なことは、いつも神さまが、私たちと一緒にいてくださることを信じることです。確かに目で神さまを見ることはできません。耳で神さまの声を聞くこともできません。しかし、神さまは今も、聖霊をとおして、私たちと一緒にいてくださいます。だからこそ、私たちがお祈りするとき、神さまはそれを聞いて、祈りに応えてくださいます。

詩編では、このように語られています。

46:2 神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。

苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。

46:3 わたしたちは決して恐れない

地が姿を変え 山々が揺らいで海の中に移るとも

46:4 海の水が騒ぎ、沸き返り その高ぶるさまに山々が震えるとも。

神さまは、いつでもみんなと一緒にいてくださいます。この神さまが、イエスさまによって私たちを救ってくださいました。そして、どんなときでも神さまにお祈りすることができます。だからこそ、どんなときでも、イエスさまやパウロのように、神さまを信じて、神さまにお祈りすることができるようになっていただきたいと思います。

お祈りします

神さま、私たちは、神さまを忘れて、悪いことをしてしまうこともあります。どうか、お赦してください。そして、どんなときでも一緒にいてくださる神さまを信じて、神さまを頼り、神さまに祈ることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によりお祈りします。 アーメン

教会では、十戒が教えられています。10の戒めと書きますし、「～ねばならない」と命令されることばかり語られるので、神さまによって救われるためには、「これを守らなければならない」と思ってしまう人もいます。

実際、イエスさまの時代のユダヤ人、律法学者やファリサイ人たちは、神の戒めである律法を守ることを求められました。しかし、神さまは、そのようなことは求めて織られません。

福音書でも同様のことが語られています。イエスさまのところに、一人の金持ちの青年がやってきました。そして先生であるイエスさまに「先生、永遠の生命を得るにはどうすれば良いですか」と尋ねます。

このときイエスさまは「戒めを守るように」と語られます。青年は、「それらは皆守っています」と答えました。しかしイエスさまは、「ではそこにいる貧しい人を助けなさい」と語られます。自分のお金を用いて、援助することです。この青年は、行うことができませんでした。自分のお金が減ることが嫌だったからです。

イエスさまが語りたかったのは、隣人を愛すること、つまり苦しんでいる人のことを思って行動できますか、と尋ねておられるのです。イエスさまはこの青年の心を見ておられたのです。苦しんでいる人たちに対する青年の心であり、隣人への愛をですね。

神さまは、十戒・戒めによって、すべてを守ると救われるよと語っておられるのではありません。十戒を完全に守ることができる人などいないからです。そうではなくて、十戒を守ろうとするとときに、十戒の前半は神さまを愛すること、そして後半は隣人・まわりにいる人たちを愛することを求めておられるのです。完全ではなくても、神さまを信じて、神さまを愛すること、周囲の人たちを愛するとき、神さまは喜んで下さいます。

そして神さまは、十戒を守ることでは救われることはありませんが、神さまを信じて、神さまの語られる十戒に従って生きようとする、その信仰を見て、あなたはイエスさまによって罪が赦されたのですよ、義と認められたのですよ、とお語り下さいます。

ガラテヤ2:16 けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。

私たちは十戒を守りなさい、神さまが命令されたことをすべて行いなさい、と語られても行うことができません。罪人だからです。しかし、自分の弱さ・罪を受け入れ、神さまを信じて愛し、隣人を愛することができるとき、神さまは喜んで義と認めて下さり、神の子どもとして受け入れて下さいます。神さまを信じて、神の子どもとして、歩んで頂きたいと思います。

お祈りします。

神さま、私たちは自分で立派な行いをして、神さまから赦され、救われることはできません。しかし、神さまは、イエスさまの十字架を受け入れ、神さまを信じるとき、義と認めて下さい、私たちを神の子として受け入れて下さいますことに感謝します。神を信じて、神の子となることができるようにお導き下さい。

イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン

神さまは、みんなのことを良く知っておられます。そして、みんなのことが大好きです。今日は最初に聖句を確認します。旧約聖書において語られていることですが、神さまからの使い、つまり天使が語りかけてくださいます。

ダニエル10:19 彼は言った。「恐れることはない。愛されている者よ。平和を取り戻し、しっかりしなさい。」こう言われて、わたしは力を取り戻し、こう答えた。「主よ、お話しください。わたしは力が出てきました。」

このときダニエルは、神さまがいつも一緒にいてくださり、守ってくださることを信じることができました。

つまり、神さまはいつでも私たちと一緒にいてくださり、私たちの味方でいてくださいます。みんなもお祈りをするところがあるかと思いますが、どのような思いで祈るのでしょうか？ 「祈りなんか、効かれることなどない」と思って祈っていれば、祈りが効かれることなどないでしょう。しかし、神さまがいつも一緒にいてくださるからこそ、神さまは喜んで、私たちの祈りを聴いて下さいます。そして聞き届けて下さいます。

神さまは私たちの祈りを聴いて下さるのですが、ときに苦しくなることが結果として与えられるときもあります。だから「神など嫌いだ」、「神などいない」と思う人も少なくないのですが、聖書には、次のようにも語られています。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています」(ローマ8:28)。神さまは苦しいことを、あるいは失敗することも私たちに与えられることがあります。遠回りしているなと思うこともあります。

先生はテストが苦手で、大学受験に2年間失敗し続けました。苦しかったです。嫌になりました。しかし今では、自分の弱さを受け入れ、神さまを信じて委ねるようにするために与えられた時間だったと理解しています。

ときには誤ったことを行っていることにストップをかけるために、苦しまなければならないこともあるかもしれません。

しかしみんなが忘れてはならないこと、それは、神さまはいつでもみんなのことを見守っていて下さいます。そしてみんなのことが大好きです。だからこそ、みんなもいつでも神さまを愛して欲しいです。教会に来て欲しいです。そうすると、神さまは、喜んで下さいます。

お祈りしましょう。

神さま、いつでも神さまが私たちと一緒にいてくださり、ありがとうございます。私たちの祈りを聴いて下さり、ありがとうございます。私たちはすぐに神さまを忘れてしまいます。だからこそ、いつでも、神さまを覚えて、そして神さまにお祈りすることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

毎週、教会に来ている人は、月に一度、聖餐式を行っていることを知っているかと思います。パンとぶどうジュースが前に置かれ、説教の後に、聖餐式が行われます。聖餐式のことを主の晩餐とも語ります。

小さなパンとわずかなぶどうジュースですが、欲しいなと思ったこともあるかと思います。しかし、聖餐式に参加するには、自分で信仰を告白して洗礼を受けるか、もしくはお父さん・お母さんの信仰によって幼児洗礼を授かった人でも、信仰告白をしてからでなければなりません。なぜならば、聖餐式に参加するためには、クリスチャンとしての責任が求められるからです。

つまり、聖餐式で与えられるパンとぶどうジュースは、十字架に架かられたイエスさまのことを覚えるためだからです。イエスさまは、私の罪を代わりに背負って十字架に架かられたことを信じることが求められます。イエスさまが私に代わって十字架に架かってくださったからこそ、私の罪が赦されたのだ。イエスさまが十字架の死から、三日目の朝に復活してくださったからこそ、私も、復活の生命が与えられ、天国に入ることができるのだと、ということを感じなければなりません。

また、聖餐式では、わずかなパンとぶどうジュースですが、神さまは、神さまを信じる人たちみんなが、天国で、イエスさまが招いてくださる晩餐・食事に招いてくださいます。聖餐式でパンを食べ、ぶどうジュースを飲むとき、私も天国で、この食事に招かれているのだと信じて、喜びと希望をもつことができますのです。

だからこそ、聖餐式でも、毎回お読みする聖書の言葉を確認したいと思います。

11:26 だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、
主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

ここにいる人たちは、幼児洗礼を受けている人が多いですが、まだ信仰を告白していません。中学生になると、信仰を告白することを考えていただきたいと思います。

イエスさまが救い主です。

イエスさまの十字架によって、私の罪が赦され、私は神の子とされています。

だからこそ、このことを信じるとき、私たちは、天国の喜びをもって、希望をもって、毎日を送ることができます。

お祈りします。

神さま、私たちは弱く、聖書の言葉を聞くだけでは、イエスさまによる救いが分からないこともあります。しかし、聖餐式により、パンを食べ、ぶどうジュースを飲むことにより、イエスさまの十字架が、私のためであったことを確認することができます。天国において行われるすべてのクリスチャンが招かれている食事に、私も参加することができます。だからこそ、喜びをもって、希望を持って、毎日を過ごすことができるように導いてください。そして、まだ信仰を告白していないみんなが、イエスさまの信じて、自分の口で、信仰を告白することができるようにお導きください。

イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

「神は愛だからです」(I ヨハネ4:8) という聖書のことばがあります。神さまを信じる事が求められますが、神さまを信じるとは、神さまの愛を受け入れるということです。

神さまは私たちを愛してくださるからこそ、私たちを救ってくださいます。私たちを救うために、神さまの独り子であるイエスさまを十字架の苦しみと死にまでお渡し下さいました。それほどまでに神さまは、私たちを愛して下さいます。

そして神さまは、いつも私たちと一緒にいてくださり、守ってして下さいます。だからこそ、神さまは私たちを見守って下さいます。そして、いつお祈りしても、神さまはいつもお祈りを聞いて下さいます。

また神さまは、私たちが神さまによって救われた神の子として歩むために、十戒をお与えくださいました。「～ねばならない」との命令が語られていますが、それらのことについて、イエスさまは、次のように語っておられます。

マタイ福音書22:37～40

『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

これが最も重要な第一の掟である。

第二も、これと同じように重要である。

『隣人を自分のように愛しなさい。』

律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

神さまが私たちを愛してくださるからこそ、私たちも神さまを愛することが出来ます。そうすれば、愛する神のために、主なる神さまだけを神さまとすること、日曜日に神さまが招いてくださるからこそ、神さまを礼拝することを行います。

また、神さまが私たちを愛して救ってくださり、毎日、恵みをお与えくださっているからこそ、私たちも感謝して、まわりにいる人たちのことを愛して、助け合うのです。

そして聖書では、このように語られています。

「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。

その中で最も大いなる者は、愛である」(I コリント13:13)。

(お祈りします)

神さま、神さまが私たちを愛してくださり、救ってくださり、いつも見守り、恵みをお与えくださりありがとうございます。だからこそ、私たちも、神さまを信じて、愛し、また、まわりの人たちを愛することができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

神さまは私たちが愛してくださっているからこそ、私たちが救ってくださいました。だから、いつでも神さまは私たちと一緒にいてくださり、私たちの祈りをも聞き届けてくださいます。

このときに私たちが救われるとはどういうことかということを理解しておかなければなりません。子どもたちは、これから生きていくわけですが、お爺さん、お婆さんになり、みんな死んでいくこととなります。神であるイエスさま以外、みんな死ななければなりません。罪があるからです。

しかし神さまは、神さまを信じる私たちを死んだままで苦しみの中に置かれることはありません。イエスさまが十字架の死から三日目の朝に生き返られたように、私たちにも復活の生命をお与えくださり、天国での永遠の生命が約束されています。

このことを聖書は、花婿を迎える花嫁のことで語られます。週報ではマタイ24章としていますが、25章1～13節に変更しました。ちょうど昨日、結婚式がありました。結婚式は良いものですね。みんなが喜びに満たされます。

さて、2000年前のイエスさまの時代の結婚式では、花嫁さんは、花婿さんが迎えに来るのを待たなければなりません。このとき10人の花嫁さんがいました。日本では遅れることはあってはなりませんが、当時もそうです。しかし遅れることもありますよね。花婿さんは、予定の時間になっても来ません。夕方になり、夜になります。夜になると灯りを点けなければなりません、そのために油は必要でした。

花婿が遅くなったので、十分な油を準備していなかった5人の女の人は、他の人に頼みますがもらえませんでした。そのため、夜になり、油を買いに行かなければならなくなりました。すぐを買うことができるわけではなく、時間がかかります。

このとき、花婿が到着します。そして、十分な油を準備していた花嫁だけが花婿を迎え入れられます。天国とはこういう場所です。私たちを天国に招き入れてくださる花婿としてのイエスさまは、今、天国におられますが、いつ、私たちを迎えに来られるのかわかりません。だから、今は神さまはいらない。教会にも行かない。自分の好きに生きたい。年を取ってから教会に行き、神さまを信じれば良いのだ、とは、聖書は語りません。

聖書は、次のように語ります。

24:44 だから、あなたがたも用意していなさい。

人の子は思いがけない時に来るからである。

神さまであるイエスさまはいつでもみんなと一緒にいてくださり、見守っていてくださいます。だからこそ、いつでもお祈りし、また毎週教会に来て、神さまを礼拝していただきたいと思います。そうすれば、いつイエスさまがお迎えに来られても、私たちは、イエスさまに向かい入れられ、天国に行くことができます。

お祈りします。神さま、神さまが私たち一人ひとりを天国へと招いてくださり、ありがとうございます。そのためにも、私たちは、いつイエスさまが来られても良いように、神さまを信じて、準備しておくことができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前によりお祈りします。 アーメン

先週、私たちは、イエスさまが十字架の死から復活されたことを覚えるイースター礼拝を守りました。イエスさまがお生まれになり、30歳位に働きを始めて3年間が経ってから、十字架の死と復活を経験して、天に上られました。それは今から約2000年前のことです。

聖書が記されたのは、その頃までですから、私たちからすれば、ずっと昔の人たちが語ったことです。しかし聖書には、神さまが語られた約束の言葉もあります。つまり、まだ実現していないことです。それは、天に上られたイエスさまが、再びこの世に来られること、そのときに最後の審判が行われて、今までに生きてきたすべての人たちが甦り、そして神さまの前で裁きを受けることです。

そうして神さまを信じる人は、天国に行き、永遠に生きることができるのです。

しかしそれだけではありません。イエスさまが天に上られてから、再びこの世に来られますが、イエスさまが再臨される前に、世界はどのようなことになるのかということを、聖書は語っています。このことを「終末」と語ります。「世の終わり」とも語ります。

つまり2000年前にイエスさまをお送りくださった神さまは、今も、そして世の終わりまで、支配しておられる、今も生きておられることを語っています。

ですから、今日のタイトルですが、神さまは「わたしはアルファであり、オメガである」と語られます。アルファ、オメガと言っても分からないかも知れませんが、ローマ字を習った人ならば、ABCを知っているかと思います。アルファベットの最初がAで、最後がZです。ひらがなならば、最初が「あいう」で、最後は「わをん」です。

つまり、神さま、最初のとき（天地創造）の時から生きておられ、イエスさまが来られたとき、今も、そして世の終わりまで、神さまは生きておられます。

そしてアルファであるオメガである、最初から最後までおられる神さまは、

以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、わたしはすぐに来る。」

アーメン、主イエスよ、来てください。

と、お語りくださいます。

イエスさまはもう一度、この世に来られ、そして神さまを、イエスさまを信じる私たちを、天国へと向かい入れて下さいます。このときには、苦しみも、悲しみもありません。喜びをもって生きることができます。神さまを信じるのは、この天国の希望に生きることです。

お祈りします。

神さま、神さまは今も生きておられ、天国において、私たちを見守っていてくださることに感謝します。そして、イエスさまがもう一度この世に来られるとき、私たちを、天国に導き入れて下さることを約束して下さいました。

そして今も、私たちは、礼拝により、祈りにより、イエスさまとの交わりにあります。ありがとうございます。だからこそ、喜びをもって、神さまを信じるができるようにしてください。このお祈り、イエスさまのお名前によって、お祈りします。 アーメン

子どもメッセージ316 「白い衣を着て」 黙示録7章1～17節 2025年5月4日

聖書に記されていることの中心は、主イエスの十字架の死と復活です。それ以上に大切なことはありません。イエスさまの十字架の死からの復活を信じる人は、イエスさまが復活したように、復活の生命が与えられ、イエスさまのように天国に行くことができます。天国での永遠の生命が与えられます。これが救われるということです。

しかし、天国とはどういうところなのか、ということは、聖書ではほとんどしるされていません。しかし黙示録には、このように語られています。7:9～12 この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、…… 神を礼拝して、こう言った。

神さまが選んでくださったすべての人たちが天国に集います。アダムとエバの時代の人たちから、アブラハムに始まるイスラエルの人たち、イエスさまの弟子たち、そして新約の教会につながる世界中の人たちです。

生きている間は、迫害にあったり、苦しめられたりしていた人たちも、殺されていった人たちも、みんな集います。

そして、天国でみんなで神さまを讃美します。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、
誉れ、力、威力が、
世々限りなくわたしたちの神にありますように、
アーメン。」

だからこそ、このときには、苦しみも悲しみもありません。イエスさまと共にあり、讃美と喜びに溢れています。ですから、マタイ福音書の山上の説教で、

4 悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

と語られていたことは、神さまがお与えくださる天国において、実現します。

私たちは、このように天国における希望の人生が約束されています。だからこそ、喜びをもって神さまを信じて、みんなで神さまを礼拝したいと思います。

(お祈りします)

神さま、イエスさまが再びこの世に来られたとき、私たちも復活の体を与えられ、喜びをもって天国に入ることができます。

だからこそ、希望をもって、喜びをもって、神さまを信じた生活を送ることができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

私たちは主なる神さまを信じています。神の御子であるイエスさまの十字架の死と復活により罪が赦され、イエスさまと同じように復活の体が与えられ、天国（神の国）における永遠の生命を信じています。

私たちが天国に行くのは、今、天に上られているイエスさまが、再びこの世に来られるときです。このときに、今までに生まれてきたすべての人がよみがえり、そしてイエスさまの裁判（最後の審判）にかけられます。そしてイエスさまを信じている人を無罪にして、天国に導いてくださり、そうでない人たちの滅びが確定します。

このとき、イエスさまはどのように判断されるのでしょうか。誤りはないのでしょうか？イエスさまは私たちの羊飼いであり、私たち一人ひとりがイエスさまの羊として、私たちの声を聞き分け、区別することがおできになります。そればかりか、今日の聖句において語られていることを確認しますと、

「彼らの額には、神の名が記されている」（黙示録22:4）。

と語られています。タトゥーや入れ墨を入れている人は、自分でしているためすぐに確認することができますが、神の名の刻印が刻まれていることを、私たちは自分で確認することはできません。しかし神さまは、神さまを信じている私たち一人ひとりに、神さまが見るとすぐに分かるように神の名の刻印を押してくださっています。だからイエスさまは最後の審判で誤ることはありません。

だからこそ主なる神を救い主、主イエス・キリストの十字架こそが私たちの罪を償ってくださったことを信じている私たちは、最後の審判において、無罪と宣告され、神の国(天国)に行くことができます。

この約束は、神さまが私たちにお与えくださっているものであり、私たちが努力して、勝ち取ること、維持することが求められているものではありません。そのため私たちは、私たちに救いをお与えくださっている主なる神さまを喜び、イエスさまによる十字架の死と復活がすでに行われていることに感謝して、信仰生活を歩めば良いのです。

日本に生きていれば、クリスチャンは少ないです。しかし、世界には多くのクリスチャンがいます。またアダムとエバから旧約の時代・イエスさまの時代、そしてそれから2000年の新約の時代に、世界中に、多くの神の民クリスチャンがいます。

だからこそ、天国で行われる礼拝での賛美は、素晴らしいものがあります。

天国が約束されていることに感謝と喜びをもって、日々、歩んでいただきたいと思います。

お祈りします。

神さま、主なる神さまを信じている私たち、神の刻印が押され、天国における永遠の祝福の生命が約束されていますことに感謝します。だからこそ、感謝して、喜びをもって、信仰生活を歩み続けることができるように、お導きください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン

この時間、長い間、新約聖書の順番でお話しをしてきました。そして最後の黙示録では、これから神の国が来る終末の時代と共に、神の国（天国）が与えられる約束が語られてきました。

イエスさまが天に昇られてから2000年が経った今でも、まだ終わりのときは訪れていません。「いつなのか」とも思いますし、「終わりのときなどない」と思っている人もいるかと思えます。

しかし聖書で語られてきている約束は、すべてが果たされてきました。ですから最後の約束である終わりの時も、神さまが定められたときにやってきます。ただ私たちは、「まだなのか」という必要はなく、神さまを信じて、待ち続けることが求められています。

そして神さまは聖書でこのように語られます。

黙示録22:20 以上すべてを証しする方が、言われる。

「然り、わたしはすぐに来る。」

アーメン、主イエスよ、来てください。

終わりの時、イエスさまは必ず来ることを約束してくださいました。2000年も経つのに、「すぐに来る」とは、嘘だろうと思われるかも知れません。

しかし、主なる神さまであるイエスさまはいつからおられるのでしょうか？ 天地万物が創造される時からおられるのですよね。天地創造の初めに「光あれ」と語られたのは、御子であるイエスさまですよね。神の御子であるイエスさまは、永遠に生きておられます。ですから、イエスさまにとって1000年という時であっても、私たちの一日のような感じです。2000年だから2日ですか？ 私たちでも2日前のことならば覚えているのではないのでしょうか？

イエスさまは、今、天国におられ、私たちが天国に入るための準備をおこなってくださいています。そして、すべての準備が整ったとき、つまり、私たちの居場所をつくり、そして神さまが救ってくださるすべての人が教会に集められたとき、イエスさまは、もう一度、この世に来てくださり、神さまを信じる私たちを天国へとお招きくださいます。

このときは、私たちにはいつか分かりませんが、いつイエスさまが来られても良いように、今日も明日も、私たちは神さまを信じて、希望をもって、今日の生活を歩んで行くことが求められています。

お祈りします。

神さま、イエスさまが私たちを救い、天国に入れて下さるために、もう一度、この世に来てくださる約束を、ありがとうございます。だからこそ、希望をもって、天国を夢見つつ、毎日を歩むことができるようにしてください。

このお祈り、イエスさまのお名前により、お祈りします。 アーメン